

Title	「パリア」の作家誕生：労働者階級の作家フロラ・トリスタンの生涯と作品
Author(s)	村田，京子
Citation	女性学研究．2009，16，p.27-73
Issue Date	2009-03
URL	http://hdl.handle.net/10466/12660
Rights	

「パリア」の作家誕生

— 労働者階級の作家フロラ・トリスタンの生涯と作品 —

村田 京子

19世紀フランスにおいて、フェミニズム運動の先駆者としてスタール夫人とジョルジュ・サンドが一般に知られているが、その他に様々な女性が男女平等の権利を要求する運動に携わってきた。その中でとりわけ異彩を放つのがフロラ・トリスタンで、彼女はマルクスに先駆けて国籍を越えた労働者たちの連帯を呼びかけ、労働者自らによる労働組合を組織することを唱えた。しかもスタール夫人やサンドのようなブルジョワ階級の出身ではなく、労働者階級の出であることにも彼女の特異性が見出せる。19世紀当時においてトリスタンはサンドにも比する才気溢れる作家としてもてはやされ、またスペイン系の血を引いた彼女の美貌は、エキゾチックな魅力で一世を風靡した。同時代の作家ジュール・ジャンンは彼女を次のように描写している。

彼女は素晴らしくきれいだ。[…] 優雅でしなやかな体つき、誇り高く生き生きとした顔つき、オリエントの火に満たされた眼、マントの役目を果たす長い黒髪、輝かしい光沢の美しいオリーブ色の顔色、[…] 繊細で挑発的な整った白い歯、優雅な佇まい、しっかりした足取り、簡素な服装。[…] 眼を輝かせ、陽光を浴びる蛇のように肘掛け椅子にうずくまった彼女を一目見るだけで、彼女が遠い国の出身、光と影の娘、北の国に紛れ込んだ暑い国の娘だと見分けられたであろう¹⁾。

1837年のサロンには画家ジュール・ロールが描いた『フロラ・トリスタン夫人の肖像』が展覧されている。また1839年から40年にかけて貴族、ブルジョワ階級から女優、作家、詩人、女工など民衆の女性も含めて当代の美女を取り上げた『パリと地方における美人肖像画集』が出版されて人気を博したが、彼女を描いたデッサンもそこに含まれていた（図版1参照）。しかしフロラが1844年に41歳で亡くなった後は48年の二月革命の動乱にまぎれて、彼女の名は次第に忘れられていった。フランスでその功績がアン

ドレ・ブルトンらに再評価されるのは20世紀半ばになってからである。これまで印象派の画家ポール・ゴーギャンの祖母という形で紹介されることが多かったフロラ・トリスタンだが、最近彼女の作品が次々に復刊され、フェミニストとしての彼女の社会思想が注目を浴びるようになった。

本稿では日本では無名のフロラ・トリスタンの数奇な生涯とその作品を検証していきたい。彼女の代表作『ある女パリアの遍歴 1833-34』（以下『遍歴』と略す）



図版1 フロラ・トリスタン
『パリと地方の美人肖像画集』（1840）

は、彼女が父親の遺産相続を求めて単身赴いたペルーでの出来事を描いた旅行記で、この旅行を契機に作家フロラ・トリスタンが誕生する。彼女の人生は旅行前と旅行後に大きく二分されるため、ここではまず、ペルーに旅立つ以前の彼女の半生およびペルー滞在中の出来事に触れた後、『遍歴』の内容を分析した上で、フランスに帰国してから死ぬまでの彼女の人生を辿る。『遍歴』に関しては、女性の視点で書かれた旅行記がどのようなもので、彼女がなぜ「パリア」と名乗っているのか、その意味を明らかにしていきたい。

1 フロラ・トリスタンの半生（ペルー出発まで）

フロラ・トリスタンは1803年4月7日、フランス人の母アンヌ＝ピエール＝テレーズ・レネと、ペルー人の父ドン・マリアノ・デ・トリスタン・イ・モスコソとの間に生まれた（本名フロール＝セレスチヌ＝テレーズ＝アンリエット、通称フロラ）。父のマリアノはアステカ最後の皇帝モクテズマ二世に遡るペルーの名家の一員で大富豪であった。当時、モスコ

ーソー族は大土地所有者としてペルー植民地政府で権力を振るっていた。フランス革命中、アンヌは革命を逃れてスペインのビルバオに渡っていたが、そこでスペイン陸軍大佐トリスタンと知り合い結婚した。当時、軍人の結婚にはスペイン国王の許可が必要であったが、トリスタンは国王の承認を求めず（その理由は定かではない）、亡命してきたフランス人僧侶が教会で二人の結婚式を執り行った。そのため登記簿には記載されず、二人の結婚は法的には無効であった。マリアノは1802年に退役してトリスタン夫婦はパリに移住し、そこでフロラが誕生した。フロラは父の認知にも関わらず、結婚の書類不備のため私生児扱いされ、それが彼女の人生に大きな影を落とすことになる。ただし、父親が生きている間はペルーの実家から潤沢な仕送りを受け、一家は贅沢な暮らしを享受できた。

1806年5月にトリスタンはパリの一等地ヴォージラルの美しい庭園に囲まれた屋敷を購入し、そこには、後に南米での植民地解放運動に携わり「解放者（*El Libertador*）」として名を馳せる若きシモン・ボリバル（図版2参照）も、しばしば姿を見せた。しかし幸福も束の間で、1807年6月14日に父親のマリアノは脳卒中で突然死する。その時母親のアンヌは臨月で、6月27日に男の子（マリアノ=ピオ=アンリック・トリスタン）を出産する。当時ナポレオン戦争の最中で、1808年にはヴォージラルの屋敷は敵国スペインの財産としてフランス政府に没収され、母親のアンヌは子どもたちを連れて住居を転々とする。ペルーのマリアノの財産の管理は、弟のドン・ファン・ピオ・デ・トリスタンに委ねられた。夫の死後、アンヌはピオに20通以上の手紙を送るが、返事はなかった²⁾。1810年に彼女はパリの近郊リラダンに土地を買い、そこでフロラが15歳にな



図版2 南米の解放者
シモン・ボリバル

る1818年まで暮らす（その間に弟は9歳で死亡。そこでの暮らしぶりは定かではない）。1818年2月に、財政的に困窮したアンヌはリラダンの土地を売り、当時最下層の人々が住んでいたパリのカルチエ・ラタンに居を定める。フロラはそこで貧しい労働者や娼婦たちを目のあたりにする。困窮生活の中で母親は、フロラには高貴な血が流れていて、ペルーに行けば贅沢な暮らしが待っていると娘に何度も言い聞かせ、フロラの内に「貴族の誇り」を植えつけた。

トリスタン一家に生活費の援助をしたのは、アンヌの兄で元ナポレオン軍将校トマ＝ジョゼフ・レネで、彼は手に職をつけさせるために姪のフロラをデッサンの学校にやってくれた。そこで彼女は家柄のいい青年と恋愛をし、結婚話が持ち上がる。しかしフロラが私生児であることを知った相手の両親の反対で二人の関係は断たれる（フロラによれば、青年は自殺したとされる³⁾）。彼女は初めて私生児に対する世間の偏見と差別を知り、母親と社会を激しく非難するようになる。ドミニック・デザンティが指摘しているように、フロラの性格の欠点は「激しい怒りの発作⁴⁾」で、フロラ自身が自らを「多血質」（165）だと分析するほど、彼女は自他共に認める短気で怒りっぽい性格であった。彼女は生涯にわたって何度か激しい怒りの発作に襲われることになる。デザンティの言葉を借りれば、「同時代の女性たちが気鬱ぎ、失神や頭痛に逃れたのに対し、彼女は怒りの中に自らのエネルギーを発散していた⁵⁾」。

1820年にフロラは生活費を稼ぐために石版工アンドレ＝フランソワ・シャザル（兄のアントワヌは有名な画家ジロデの弟子）の工房に彩色工として働くようになる。労働者階級に属しながらも彼女の貴婦人然とした物腰とその美しさにシャザルは一目惚れし、プロポーズをする。結婚することで生活の安定を得られると喜んだ母親と叔父の強い勧めによって、フロラは1821年2月3日にシャザルと結婚する。この結婚に関しては、彼女は『遍歴』の中で「母は私が愛することも尊敬することもできない男と無理やり結婚させた」（50）と語っている。翌年には男の子が生まれる（10歳で死亡）が、虚弱体質のフロラは出産後、回復するのに数ヶ月床につかざるを得なかった。また1824年6月22日には次男エルネスト＝カミーユを出

産する。フロラは自分の産んだ子どもに母性愛をあまり感じず、病気がちの二人の子どもを哀れに思いながらも、育児や家事に追われて家庭に縛られることへの反抗心を覚えていた。彼女は後に女性の立場をパリア[paria: インドのカースト制度で最下層に位置づけられた不可触賤民]に喩えて次のように述べている。

女性はこれまで人間社会において何の価値も持っていなかった。[…] 僧侶も立法者も哲学者も女性を真のパリアとして扱った。女性（それは人類の半分に当たる）は教会の外、法の外、社会の外に置かれていた⁶⁾。[強調は作者自身]

こうした考えは、彼女が結婚生活から得た苦い果実であった。もともと夫への愛情を持っていなかった上に、スタール夫人やラマルチヌ、ウォルター・スコット、バイロンの作品を読み耽るロマン主義的な気質で知的好奇心が強く、気位の高いフロラと、職人氣質の夫とは性格も趣味もかけ離れていた。夫婦仲は悪化し、シャザルは居酒屋に入り浸り、飲酒と賭け事におぼれて家にはお金を入れなくなる。1836年にフロラが夫との別居を求めて法廷で争った時 —当時、離婚は禁じられていた⁷⁾—、フロラの弁護人はシャザルが1825年頃、彼の「賭博熱」のために妻に売春を強制しようとしたと陳述している⁸⁾。夫が妻に売春を強制することは当時それほど珍しくなく、この裁判を大きく扱った法廷新聞や裁判官は「無関心な態度⁹⁾」を装ったという。ともあれ、夫の言葉を聞いたフロラは激怒して家を飛び出し、母親の元に身を寄せる。夫の方も借金取りに追われ、しばらく身を隠す必要があったため、フロラは束の間の自由を味わう。しかしこの時彼女は3人目の子どもを身ごもっていた。母親はフロラを喜んで迎え入れたが、保守的な叔父は夫の元から自分の意志で飛び出すような女は社会の外にあるパリアだとフロラを激しく非難した。それに対してフロラは「それならば、私はパリアになる！¹⁰⁾」と誇らしげに答えたという。それが後に彼女自らがパリアと称し、『ある女パリアの遍歴』を書く動機となった。

「パリア」という言葉は、フロラが愛読していた18世紀の作家ベルナルダン・ド・サン=ピエールがその著『インドの藁ぶきの家』（1790）で言

及し、19世紀においては『パリア』というタイトルの芝居が上演されるなど¹¹⁾、一般に知られた言葉であった。それはインドのカースト制度の最下層階級を指すばかりか、比喩的には「同胞から軽蔑され、拒絶された人間¹²⁾」を意味し、「排除の普遍的な象徴¹³⁾」となっていた。この「パリア」という語を女性と結びつけたのが、スタール夫人である。彼女は『文学論』(1800)の中で、知性のレベルで「優れた女性」を「パリア」に喩えている¹⁴⁾。「優れた女性」は、男性優位の社会においてジェンダー規範を逸脱し男でも女でもなく、どの階級にも属さない存在とみなされたのだ。フロラ・トリスタンはさらに、この「パリア」という言葉を女性全体に敷衍して使うことになる。また、ベルナルダン・ド・サン＝ピエールの小説では、「パリア」は社会の腐敗や愚かさから免れた人物を指し、「一種の知恵」の持ち主または「救済」を約束する存在でもある¹⁵⁾。それもまた、後に自らを「救世主」とみなすフロラと無関係ではない。

1825年10月16日に、フロラは女の子アリーヌ＝マリーを出産する。彼女はこれまでとは違い、自分とそっくりな娘に強い愛情を感じ、母と娘の密接な関係は一生継続ことになる。この頃、フロラはイギリスの社会思想家でフェミニズム運動の先駆者であったメアリ・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』(1792)を読み、大きな影響を受けた。ウルストンクラフトは男女の機会均等を訴え、女性が男性と同じ教育を受けることを主張した。フロラは後の著作において、男子教育と同じ女子教育を推進すべきだと一貫して主張することになる。1825年末には、子どもたちの養育費と生活費を稼ぐために、彼女はイギリス貴族の女性たちの付添婦 (*lady's maid*) となって1830年頃まで雇い主に従い、イギリス、スイス、ドイツなどヨーロッパ諸国を巡り、様々な経験をしたとされる。その間二人の男の子は里子に出し、娘の面倒は母親に任せ、フロラは独身という触れ込みで仕事に就いていた。というのも、結婚して子どもがいることは当時の社会では就職の大きな妨げになったからだ。誇り高いフロラは付添婦時代を恥じて、その間の書類を全て廃棄したため、彼女がどのような人物に仕え、どのような暮らしをしていたのかは定かではない。1828年5月には、夫に給金を奪われることを恐れて、セーヌ県民事裁判所に財産分離の訴訟を起

こし、それが認められている。

1829年に娘のアリーヌと一緒にパリで暮らすようになったフロラは、ペルーとフランスを往復する定期船の船長ザシャリ・シャブリエと出会う。彼からペルーの叔父ピオの消息を聞いた彼女は、叔父に手紙を書くことを決意する。またこの頃、サン＝シモン主義者の集会にしばしば出席するようになる。サン＝シモン主義は、新しい宗教のもと、人道主義に基づいた産業至上主義を標榜する社会思想で、当時サン＝シモンはすでに亡くなっていたが、その弟子バザールと、^{エコール・ポリテクニク}理工科学学校出身のアンファンタンが師の教えを広めていた。集会には理工科学学校の学生や技師、産業家、弁護士、新聞記者や芸術家など富裕層および知識階級が多く参加し、女性や労働者は少数であった。彼らは所有者よりも生産者を優先し、「政治は生産者の境遇を改善すること以外の目的をもってはならない。生産者たちはその能力によってのみ評価され、能力と成果に応じた報酬を得るべきだ¹⁶⁾」と主張していた。ゲルハルト・レオはフロラの立ち会った集会の様子を次のように描写している。

アンファンタンとバザールは、サン＝シモンの関心がプロレタリア階級に向かっていた晩年の頃の彼の考えを説明していた。フロラは友愛と「新しいキリスト教」について話されるのを耳にした。「最も貧しく最も数の多い階級」の惨状を軽減しなければならない。彼女は賃金労働者との強い連帯感に感動したが、彼らが女性について語る口調により一層感動した。「女性とプロレタリア階級はどちらも解放が必要だ」とアンファンタンが説いていた。[…] 彼は次のように予言した。「世界の救済は女性から生まれるだろう。民衆を救うのは女性だ。」¹⁷⁾ [下線引用者]

このようにサン＝シモン主義のトリスタンはとりわけ、「女性とプロレタリアの解放」「女の救世主」という主張に感銘を受けていた。アンファンタンはさらに、男女平等の自由な社会を目指すためにも離婚の権利を獲得することが必要だと訴えた。既成の価値観を打ち破るサン＝シモン主義の新しい思想は、それまで独学で知識を習得してきたフロラの世界観を大きく広げることになる。

1830年に7月革命が勃発し、フロラは「栄光の三日間」を目の当たりにした。7月革命は、シャルル10世の反動政府に対して新聞記者たちが「言論の自由」を求めて民衆に蜂起の呼びかけをしたことに端を発する。民衆はパリの要所にバリケードを築いて政府軍と戦い、7月27日から29日までの3日間は戦況を優位に進め、ブルボン宮やルーヴル宮を占領する事態となる。それが「栄光の三日間」と呼ばれるものであった。しかしながらその後、事態を掌握したのはラフィットなど金融資本家を中心とするリベラル派の政治家であった。それゆえ民衆の共和政への夢は消え、ブルジョワの王ルイ＝フィリップが即位することでブルジョワの覇権が確立する。フロラは以前立ち会ったサン＝シモン主義の集会で、人道主義的な新しい社会の実現を熱っぽく語っていたラフィットが民衆を弾圧する側に立っているのを間近にし、失望を抱く。

1832年に夫シャザルからの働きかけで、母親と叔父のレニの立会いのものと話し合いがもたれる。その結果、別居の条件として息子のエルネストを夫に引き渡すことになる。娘も夫に奪われることを恐れてフロラは自分の居所を夫に秘密にしていた。それにも関わらず、カルチエ・ラタンの住まいの近くで夫が彼女の帰りを待ちうけていた。彼に掴みかかれ、暴力をふるわれるフロラの姿を見て3人の青年たちが駆けつけてきた。その時の様子をフロラは次のように記述している。

男性たちが急いで私を助けに来てくれた。彼らはシャザルに対して私を守ろうとした。その時シャザルが叫んだ。「彼女に触るな。それは私の妻だ、妻なんだ！」。残念ながら私はその通りだと答えた。男性たちは法学部の学生であった。彼らは私にこう答えた。「もしあなたの夫ならば、僕たちには何もできません。もしあなたの夫でなければ、彼に女性の扱い方を彼がそうしたように〔腕力で〕教えてやるのですが。」¹⁸⁾

要するに、当時の法律では妻は夫の「所有物」で夫の好きなように処することができた。それが、ナポレオン民法に基づいた結婚制度の実態であった。フロラは夫の追跡を逃れてフランス中を転々とする。アングレーム

で娘のアリーヌをブルザック夫人が経営する寮に預け、単身ペルーへ出発することを決意する。彼女はそれまで様々な職に就いたが、娘の養育費や生活費を賄うには十分ではなかった。そのため、亡き父マリアノが父親代わりとなって育てた弟ピオの情に訴えて父の遺産を分けてもらおうと考えたのだ。

フロラは1829年にシャブリエから叔父のピオの消息を聞いた後、ピオに手紙を送っていた。その手紙では自分に不利になることを恐れて、自らの結婚や子どもがいることには触れず、父の死後の母親の苦労や生活難を訴え、父親の遺産相続に与りたいと率直に書いた。しかも母親には正式な結婚証明書がないことを正直に書き、その代わり自らの洗礼証明書の写しを送り、ピオの「公正さ」と「善良さ」(207)に訴えた。それに対して1830年10月に叔父から返事が届く。叔父のピオは当時57歳でアレキパ地方〔ペルーの南に位置し、アレキパはリマに次ぐ大都市〕で最も裕福な土地所有者として知られ、数多くの奴隷を擁し、製糖工場も幾つか経営していた。1824年のペルー独立戦争の時には植民地政府側の司令官として活躍したが、独立軍が優勢な状況になるや一転してボリバルの解放軍に寝返るという老練な策謀家であった。さらに1850年以降には軍事大臣、外務大臣の地位に就き、ペルーで最も保守的な重鎮として名を成すことになる。したがって20年来消息のわからなかった兄の娘が突然、財産分与を要求してきても情にほだされるような人物ではなかった。彼は特に金銭的に細かく、莫大な財産を所有しているにも関わらず、他の貧しい親戚に対してもわずかな援助をするに留めていた。叔父は手紙の中でフロラを兄の実の娘と認めたが、フロラの母親は正式の妻とは認めず、財産を相続することはできないと冷酷に言い放っていた。唯一、89歳の彼女の祖母から生前贈与としてフロラに3000ピアストルが贈られるということであった。フロラは次のように記している。「この返事を受け取った時、性善説を信じていたにも関わらず、叔父には何も期待してはいけないということがわかった。しかし私にはまだ優しいおばあさまが残されている。私の希望は祖母に向かった」(213)。

彼女がペルー行きを決意したのは、単に金銭的理由だけではない。彼女は自らの旅を本に書こうと考えていた。実際、ナポレオンのエジプト遠征

以来、19世紀前半にはオリエンタリズムが流行し、異国の旅行記や紀行文が次々に出版され人気を博していた。それゆえ、南アメリカのペルーというフランスからかけ離れた国のエキゾチックな自然や風習を描けば珍しがられ、評判を取るに違いなかった。そのため、彼女はペルー旅行の間、綿密にメモを取り、日記を書くことを怠らなかった。フロラはすでにイギリス滞在中に多くの本を読んで独学し、さらにサン＝シモン主義の思想を知り、7月革命の動乱も体験していた。まだ社会の出来事を注意深く観察する段階に留まっていたが、サン＝シモン主義の幾つかの原理、すなわち「民衆の生産的な労働の尊重」「女性の解放」を自らの信条としていた。それは労働者として、また夫の迫害を受ける妻として、彼女自身が味わった苦い体験によって裏打ちされたものだ。したがって、ペルー旅行記は単なる紀行文ではなく、その中に彼女の政治的な思想が織り込まれている。フロラはボルドーに住んでいたピオの従兄ドン・ベドロ・デ・ゴエネシュに会いに行き、ピオへの紹介状をもらって、ボルドーからペルーへ旅立つことになる。

2 ペルーへの旅

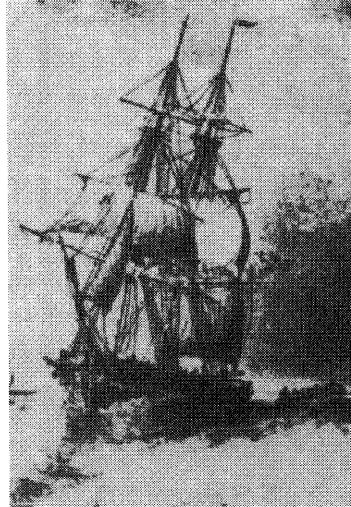
1833年4月7日、フロラはボルドーの港から商船メキシカン号（図版3参照）で、ペルーに向けて出発する。船長は偶然にも数年前に知り合ったシャブリエであった。船に乗り込んだのは彼女を含めて5人の乗客と15人の船員で、彼女以外はすべて男性であった。彼女は133日にもわたって船旅を続けたが、次第に船員同士の揉め事の仲裁役を務め、皆が彼女に助言を求めるほど頼りにされるようになる。5月2日にセネガル北西の火山島群で当時、ポルトガルの植民地であったベルデ岬諸島（図版4参照）の首都プラヤに船の修理のために上陸し、10日間滞在する。そこで過酷な奴隷制度にフロラは直面することになる（詳細は第3章で触れる）。再び船での生活が始まり、赤道を通過する時には暑さと雷雨、船倉にたまった水の腐敗による臭気などで乗員は苦しみ、とりわけ虚弱体質のフロラは病に倒れる。彼女を献身的に看護したのがシャブリエ船長で、彼は彼女の身の上（彼には

「未婚の母」という偽りの告白をしていた)に同情したばかりか、美貌の彼女に惚れ込み、結婚の申し込みをする。フロラは彼に真実を告白するかどうか迷った末に、彼に軽蔑され、彼の庇護を失うのを恐れて真実を言い出せなかった¹⁹⁾。

1833年8月18日にチリのヴァルパライソ(図版4参照)に到着したが、フロラはそこで、ちょうど彼女がボルドーを発った日に祖母が亡くなったことを知る。その知らせを聞いて最後の希望が消えたと落胆するが、それでも父の遺産分与を要求すべく、ペルーに向かうことを決意する。

9月3日に、フロラはアメリカ船レオニダス号に乗船し、8日後にペルーのイズレーに到着した。そこで彼女は、叔父のピオがカマナの製糖工場に視察に行つてアレキバを留守にしていることを知る。叔父と対決する前に情報を集める必要があると考え、彼女はまずアレキバに向かう。焦熱地獄のような砂漠を2日間にわたって横断した後、アレキバの叔父の屋敷(父親が生まれた家)に到着し、大勢の親戚や地方の名士たちに迎えられる。叔父のピオがアレキバに戻るまで3ヶ月待つことになる

が、その間に彼女はペルーの支配階級や民衆の生活をじっくり観察することができた。従姉のカルメンがアレキバの上流社会の案内役を務め、フロ



図版3 メキシカン号



図版4 フロラ・トリスタンのペルー旅行で辿った航路

ラはどこでも自由に出入りすることができた。

『遍歴』にはアレキパの歴史、地理、人々の生活や風習などが余すことなく描かれている。アレキパの人口は当時4万人程度で、そのうちインディオが2万人、黒人または混血が1万人、白人が1万人で、スペイン人の血が流れていることが「貴族の称号」(323)となっていた。フロラは支配階級として君臨する白人が民衆を教育する代わりに、僧侶階級と結託して彼らを「愚鈍な状態」(278)に置くことで自らの権力を維持していると痛烈な批判を浴びせている。また、彼女はアレキパの施療院、精神病院、孤児院などを訪れたが、その中でも孤児院で孤児の置かれている悲惨な状況—わずかな食糧を与えられるだけで教育や職業訓練が施されず、たとえ成長しても浮浪者になるしかない実態—を怒りを込めて指摘している。修道院に関しても、その一つのサンタ・ローザ修道院におけるあまりに厳格な規律と修道院長の理性の限界を超えた「宗教的ファナティズム」(452)を批判し、その犠牲となった従姉のドミンガに同情と共感を抱いている。

1834年1月3日に彼女は叔父のピオと初めて顔を合わせる。叔父は「山岳人特有の頑固さと狡猾さ」と同時に「フランス風の優雅さ」(349)を合わせ持ち、完璧なフランス語を操り、一見柔和で洗練された宮廷人の風貌を備えていた。彼はフロラを愛想よくもてなすが、彼女が父親の相続財産に触れると態度が豹変し、「守銭奴」(357)の顔つきに変貌する。彼はフロラの母親の正式の結婚証明書がない限り、私生児には財産を相続する権利がないと冷然と言いつつ放った。フロラは彼の肉親への情愛や寛容さに訴え、父親の遺産100万ピアストルの8分の1にあたる5000フランの年金[現在の日本円で500万円相当]を支給してもらうよう頼むが、結局無駄であった。彼女は叔父の家を飛び出して訴訟を起こすことも考えたが、従兄のアルトハウスの取りなしで、2500フラン[250万円相当]の年金支給で叔父と折り合いをつけることになる。

1834年1月23日、ペルーの首都リマで革命が勃発した。ペルーは1825年にスペインから独立を果たしたばかりの新しい国で、政治的に混乱状態にあった。当時の大統領ベルミュデスは前大統領ガマラの傀儡政権であったが、その政敵が議会でオルベゴゾを大統領に承認した。そのため、元大統

領ガマラ、前大統領ベルミュデス、新大統領オルベゴゾという3人の大統領の覇権争いが起こり、内戦状態となった。フロラは戦争への憤りとペルー国民への思いを、次のように記している。

私はこのスペイン系アメリカの不幸を嘆かざるを得なかった。そのどこにも、人や所有物を保護する政府がいまだかつて安定して樹立されたことがなかった。[…]
スペイン系南米人が現在戦っているのは原理原則のためではなく、同胞からの略奪で報酬を与えてくれる指導者のためであった。戦争がこれほど胸のむかつく、これほど卑劣な様相を呈したことはなかった。この不幸な国々で戦災が終結するのは、貪欲な心を誘惑するものがもはや何もなくなくなってからであろう。その時は速くはない。いつかついに神が定めた日が訪れ、これらの国民が労働の旗のもとに結集することであろう。願わくばその時、彼らが過ぎ去った災禍を思い出し、血と略奪にまみれた人間に聖なる憎悪を抱きますように！ […] 彼らが歓迎するのは、人間の幸福のために用いられた科学や才能だけでありますように。

(381-382) [下線引用者]

彼女は遺産相続の話し合いが終わってヨーロッパに戻る予定であったが、ペルーの社会情勢を見極めるためにもう少し留まることにする。フロラの情勢判断は冷静かつ的確で、百戦錬磨の叔父や職業軍人のアルトハウスでさえ彼女に政治的・軍事的な助言を求めるほどであった。1834年4月5日、アレキパ軍はガマラ陣営の軍隊によって敗北し、フロラは味方の兵士が壊走する光景を目撃する。敵軍がアレキパの町に姿を現したのはその2日後で、彼らが町の実力者ピオの家に来て来た時、フロラー人が軍隊と対峙する(叔父たち一家は修道院に逃げ込んでいた)。敵軍の将校は意外にも礼儀正しく友好的で、指揮官エスキュデロ大佐は才気煥発で優秀なスペイン人であった。フロラはたちまち彼と意気投合し、彼を通してガマラ軍の内情に精通するようになる。ガマラ陣営で真の実権を握っていたのはガマラ元大統領ではなく、その妻パンチャ・デ・ガマラであった。ガマラ夫人は「鉄の意志」(520)を持つ優れた女性で、フロラは彼女を「ナポレオンの野心を備えた天才的な女性」(521)と評価している。その一方で「尊大で

専制的な性格」(521)のガマラ夫人に代わり、フロラ自身がエスキュデロを通じて政治に携わり、影の指導者としてペルー国民に幸福をもたらそうという誘惑に駆られる。しかし「権力のもたらす快楽が人間に与える道德的退廃」(522)を恐れて、彼女は「野心的計画」(521)を断念する。エスキュデロに次第に惹かれていく自分を抑えるためにも、彼女はアレキパを離れ、リマに出発することを決意する。

1834年4月25日、フロラはアレキパからリマに向けて出発する。イズレーまで砂漠を横断し、イズレー湾からカラオまで船で渡り、カラオから馬車の旅を経てリマには5月1日に着く。リマでは当時アヤクチョの知事であった叔父ドン・ドミンゴの妻マニユエラが出迎えてくれた。マニユエラの案内でフロラはリマの上流社会に出入りし、好奇心の赴くままに、市庁舎や劇場、修道院、異端審問所などリマの町の隅々を観察し、リマの人々を熱狂させる闘牛も見物している。ミシェル・ペローが指摘しているように、フロラ・トリスタンは「女性最初の偉大なルポルタージュ作家²⁰⁾」で、現地に赴いて自分の眼で観察したばかりか、外的な事象の下に潜む本質を直感的に見抜く力を持っていた。彼女はバルザックやゴーチエなど当時のロマン主義作家たちと同様に、メスメル動物磁気説(magnétisme)の信奉者で、自らが「磁氣的視線(regard magnétique)」の持ち主だと考えていた。彼女は、この視線によって「他人の魂の中で生じることを読みとる²¹⁾」ことができると自負していた。さらに同じ視線を都市空間にも投げかけ、その本質を読み解こうとしている。彼女はリマの町を俯瞰し、立派な石造りの壮麗な巨大寺院が幾つも立ち並ぶ一方で、民衆の住む界限では灰色の陰鬱でみすばらしいあばら家が続いていることに気づく。この対照的な景観の中に、ペルーという国の調和を欠いた権力構造を彼女は看取している。また、議会を訪れ国会の討議を何度も見学するが、議員たちの確信に満ちた華麗な演説の裏に私利私欲を求める動機を見出して、皮肉を交えた口調で描写している。服装に関しても、服装を社会的地位や精神構造を読み取る記号とみなし、とりわけリマの女性の「サヤ」と呼ばれる民族衣装に注目している(サヤに関しては、次章で取り上げる)。

フロラはリマに2ヶ月滞在した後、フランスに帰国することになる。彼

女は出発の直前に、エスキュデロに付き添われたガマラ夫人に出会う。フロラがアレキパを離れた時には優勢に立っていたガマラ陣営だが、軍隊が略奪の限りを尽したため、憎悪を抱いた民衆が敵の陣営につき、ガマラ軍は敗れ去った。民衆の復讐的となったガマラ夫人は祖国を追われ、チリに亡命する羽目に陥っていた。ガマラ夫人を乗せたイギリス船の中で、フロラは初めて彼女と対面する。ガマラ夫人の描写は次のようなものだ。

彼女の中の全てが傑出した女性であることを示し、意志の強さでも高度な知性でも並外れた女性であった。[…] 彼女の顔は美の基準とされる尺度から見れば、確かに美しいとは言えなかった。しかし彼女が万人に与える印象から判断すれば、最も美しい女性を凌駕していた。ナポレオンと同様に、彼女の美貌の及ぼす影響力はすべて視線の中にあつた。何という誇り高さ、何という大胆さ、何という洞察力がそこに湛えられていることか！その視線は何という抗いがたい力で尊敬の念を抱かせ、人々の意志を捉え、称賛の念を抱かせることか！（639）[下線引用者]

フロラはガマラ夫人が独立当初、無政府状態に陥っていたペルーに秩序と平穩をもたらしたと、彼女を高く評価している。それだけに、極度の傲慢さゆえに多くの男性の自尊心を傷つけ、敵を作ってしまったことを残念がっている。それと同時に、凡庸な夫を大統領に就けるために彼女が味わった屈辱や苦悩を知り、自分が政治的野望を断念したことを幸いに思っている。そして、ガマラ夫人を襲う激しい癲癇の発作とその肉体的な苦痛は、伝統的な女性の役割から逸脱して権力を掌握しようとした彼女への「一種の罰²²⁾」として認識されている。

1834年7月15日、イギリスのファルマス [コーンウォール州南部の港] に向かう商船ウィリアム・ラシュトン号にフロラはカラオ港から乗船する。彼女は『遍歴』の最後を次のような文章で締めくくっている。「5時ごろ、船の錨が上げられ、皆が退出していった。そして私は海と空の二つの広大な空間の間でただ一人取り残され、全く孤独な身となった」（659）。彼女のペルーへの旅は、名門一族トリスタン家の一員と認めてもらい、自らの

アイデンティティを取り戻しにいく旅であった。フランスでは私生児として、さらに貧困階級として、また夫から逃げる妻として社会から疎外された存在で、彼女はその境遇から脱出するために父の国ペルーにやってきた。しかし正当な名前と社会的ステイタス、財産を獲得する夢は結局、果たせなかった。アレキパの叔父の家を離れる時の心境を、彼女は次のように記している。

私はこの場所を捨て去るにあたって、心が激しく動揺した。父が生まれた家を去ろうとしていた。そこに避難所を見出したと思ったのに、そこで暮らした7ヵ月の間、見知らぬ他人の家という感触しか持てなかった。私はこれまで耐え忍んできたが、一度も家族として扱ってもらえなかったこの家から逃げ出そうとしていた。そこで味わった耐え難い精神的な苦痛や、絶望感が私に吹き込んだ様々な暗示「自殺願望」から逃れていくのだ。逃れてどこに行こうとしていたのか？……私にはわからなかった。[...] どこに行っても排斥され、家族も財産も職業もなく、自分の名前さえ持てず、風任せに空に浮かぶ気球のようにあてどなく彷徨っていた。(545)

フロラは母の国フランスからも父の国ペルーからも社会的認知を拒まれ、「パリア」としての生を余儀なくされている。しかしそれと同時に、ペルーでの政治的・社会的動乱に立会い、ヨーロッパとは異なる文化に触れ、様々な経験をすることで人間的に大きな成長を遂げていた。彼女はこの旅によって、むしろ自らの置かれた状態を進んで引き受け、社会の偏見と差別に対して戦う決意を固めていた。それが自らを「パリア」と呼び、その旅行記に『ある女パリアの遍歴』というタイトルをつけたゆえんである。

このタイトルにある「遍歴 (pérégrinations)」という言葉と関連の深い法律用語 *pérégrinité* は、「ある国における外国人の身分」、さらには「民法上死んでいる (市民権を持たない) 人間の状態」を指す²³⁾。「民法的な死」はまさに、ナポレオン法典によって定められた妻の立場 — 政治的・社会的・経済的に夫に従属し、法律上「永遠の未成年」とみなされる立場

— を意味し、とりわけフロラを初めとする不幸な結婚をした女性 (mal mariées) がその範疇に属する。また、pérégrinationという言葉は「巡礼 (pèlerin)」から派生し、宗教的・神秘的意味合いを帯びている。その意味では、フロラは幼い頃に亡くなった憧れの父親を求めて、その生家を「聖なる場所」とみなし巡礼の旅に出たとも考えられる。さらにボルドーからアレキバまで133日に及ぶ過酷な船旅（嵐や赤道の太陽、疫病との闘い）や灼熱地獄の砂漠を横断したことを、『遍歴』全2巻のうち1巻を費やして彼女が詳細に描いているのは、自らの旅を「イニシエーションの旅」と位置づけていたからであろう²⁴⁾。ちょうど神話の英雄が死の危険を冒して荒れ狂う海を渡り、それを乗り越えることで「死」から「再生」への道を辿ったように、フロラは艱難辛苦の旅を経て、新しい自我に生まれ変わっている。それゆえ『遍歴』の冒頭が、自らの再生を暗示するかのように、「1833年4月7日、私の誕生日が我々の出発日であった」（65）という「出発」と「誕生」を重ね合わせた文章で始まるのも偶然ではないだろう。したがって『ある女パリアの遍歴』というタイトルは、単に空間的な移動を意味するだけではなく、彼女がポジティブな意味における「パリア」としての自覚を持つに至る「魂の遍歴」を指しているとも言えよう。

以上のように、『遍歴』には作者自身の自伝的要素が色濃く現れているが、それと同時に「ルポルタージュ作家」または民俗学者、社会思想家の視点で書いた旅行記ともなっている。次章ではそれについて見ていくことにしよう。

3 『ある女パリアの遍歴』

『遍歴』では本文の前にまず、「ペルー人たちへ」というペルー人に向けた文章が冒頭に置かれ、次に序文、さらに「序言 (Avant-Propos)」が続く3段階の前書きの構成となっている。そこで作者が強調しているのは「真実」を語るということであった。フロラが同時代の女性作家ジョルジュ・サンドを意識していたことは明らかで、サンドの名を挙げていないものの、彼女を明確に示唆する文章が序文の中に見出せる。そこでは、語り

手は女性にとって不平等な社会体制に抗議する女性の声の一つもないと嘆いた後で、自らの言葉を翻して次のように述べている。

いや間違っていた。デビュー作から高尚な思想、威厳ある完璧な文体で有名になった作家が、我々の法律によってもたらされた女性の不幸な立場を小説の形で浮き彫りにした。その作家は描写の中に多くの真実を組み入れたので、読者は作者自身が味わった不幸を予感することができた。(43)

このように、サンドを称える文章で始まるが、後半になると批判的な口調に変化する。

しかしその作家は女性であったが、著作の中で自らを隠すヴェールだけでは満足せずに、男の名前で作品に署名した。虚構の裏に隠された嘆きから、一体どのような反響が得られるというのか。小説を書く動機となった事実が現実味を失った時、どのような影響を及ぼすことができようか。(43) [下線引用者]

フロラはサンドが本名オーロール・デュドヴァンではなく、男のペンネームで作品を書いたことに批判の眼を向けている。当時、女性作家は男のペンネームを使うのが慣わしで、サンドだけではなく、マリー・ダグー伯爵夫人はダニエル・ステルン、デルフィーヌ・ド・ジラルダン¹はローネイ子爵という男のペンネームを用いていた。というのも、女性の役割が家庭という私的空間のみに限られていた19世紀フランス社会において、女性が自らの考えを新聞や本などに公表することはタブー視されていたからだ。それに対してフロラは本名を名乗ることで、より効果的に「闇に隠された不公平さを暴くことができる」(43)と主張している。そして虚構ではなく、事実をそのまま記すことに意義を見出し、次のように述べている。

生き、苦しみ、人や物事と戦ってきた人は誰でも自分が経験したり目撃した出来事をそっくりそのまま語り、不満や称賛の対象となる人物を名指ししなければならぬ。なぜなら繰り返して言うが、このような暴露の效果なしには改革は成し

遂げられないであろうし、誠実さや率直さは存在しえないであろう。(43-44)

[強調は作者自身]

したがって、フロラはその著作全てにおいて本名を名乗り、『遍歴』の中では自分の不利益になることも承知の上で、叔父やその親族について抱いた感情を「ヴェール」に包むことなく率直に書いた。彼女は「真実の存在 (être de vérité)²⁵⁾」であることを自らの信条とした。カトリーヌ・ネッシが指摘しているように、彼女の作品に強迫観念的に現れるライトモチーフはこの「真実」と、さらに「真実」がもたらす「有益性 (utilité)」の二つであった²⁶⁾。彼女は「真実」を語るがゆえに、同時代の社会や人々に働きかけ「有益に」社会改革を進めることができると考えていた。

フロラの批判的的是ジョルジュ・サンドだけに留まらない。彼女は序文の中で、ルソーをはじめとする回想録の作者の大多数が死後出版を望んだことを批判し、それでは同時代の社会に影響を及ぼすことができないと語っている。それゆえ『遍歴』では、実在の人物を批判する時も実名を挙げることを辞さなかった。さらに回想録の作家の条件としてフロラがまず挙げたのが、自ら社会的に苦しんだ経験があることで、その経験によって自分や他者の真の価値を測ることができるとした²⁷⁾。様々な苦しみを味わった「パリア」としてのフロラはまさに、回想録を書くのに最も適していた。したがって序文に続く「序言」では自らの苦難に満ちた半生を語ると同時に、ペルーの叔父たちには独身と偽った自らの嘘も暴露している。さらに、シャブリエ船長やエスキュデロとの恋愛や、重婚を承知の上で彼らとの結婚を考えたことすら『遍歴』の中で赤裸々に告白している。それは後に夫との裁判の時に夫側の弁護士に彼女の不誠実と男性関係を暴くための証拠として法廷に持ち出される要因となる。このように、フロラは自分に不利になることも覚悟の上で、社会告発を行おうとしていた。ジョルジュ・サンドの場合、後に自伝『わが生涯の記』(1854-55)を著すが、読者の期待に反してミュッセやショパンとの恋愛を赤裸々に語ることはなかった。そこに二人の女性作家の違いが見出せる。

「真実」の名のもとに筆を取るトリスタンは、「ペルー人たちへ」という

献辞の中でもペルー人たちに次のように語りかけている。

あなた方の中には私の報告を読んでまず私に敵意を抱く者もいるだろう。何人かは哲学的な努力のすえによりやく私が正しいと判断するであろう。不当な非難は何の役にも立たないが、根拠に基づいた非難は人を苛立たせる。しかしそれは結果として友情の大きな証となる。[……] あなたがたの現在の繁栄と将来の発展を私ほど真摯に望んでいる者はいないであろう。[……] 私はあなた方の愛国主義的な誇りを傷つける危険を冒して、[あなた方が誤った道に進んでいることを] 勇気を出して述べることにした。(31)

フロラは自らを「良心的な旅行者 (*voyageuse consciencieuse*)」と呼び、「いかなる真実でもそれを語る義務がある」(606) と述べているように、『遍歴』には至る所にペルー批判が見出せる。彼女はとりわけ叔父のピオを初めとする支配階級に対して「全く腐敗している」(32) と激しい非難を浴びせている。ペルーで力を振るうカトリック教会も例外ではない。キリスト教の祝祭日に演じられる聖史劇「キリストの受難などをテーマにした宗教劇」を見たフロラは、イスラム教徒やユダヤ教徒を痛めつけて笑い興じる芝居の内容が「粗暴」かつ時代遅れで、民衆を「極端な無知」と「馬鹿げた迷信」(274) に導くものと批判している。

確かに彼女の記述には、ヨーロッパとは異なる風俗習慣に対して「未開」の国にやってきた「文明人」の偏見と優越意識が見出せる。彼女が「野蛮」で「下品」と決めつける宗教的な儀式での仮面や恍惚状態で演じられる舞踊は、原始キリスト教と古代神話の融合を象徴するもので、文化人類学者ならばそこに伝統の偉大さを見たことであろう。とりわけペルー料理に対する偏見には、ヨーロッパ文化を絶対的な価値とみなす彼女の理解の限界が見出せる²⁸⁾。ただフロラの態度で一貫して変わらないのは、ペルーでは支配階級の一族に属していたにも関わらず、「民衆の眼」で観察し社会批判を行っていることだ。

とりわけ彼女の批判的となったのが、当時まだ存続していた奴隷制度であった²⁹⁾。プラヤで北アメリカ領事家に招待された時、奴隷に対する

領事の野蛮な行為に彼女は大きな衝撃を受ける。彼が黒人奴隷を棒で滅多打ちにし、奴隷が血まみれになっている光景を目撃したのだ。領事は彼女に、奴隷が盗みを働き嘘をついたから当然の仕打ちだと平然と答えた。フロラは白人に搾取され、人権を剥奪された奴隷の立場を全く無視して支配者側の論理をふりかざす領事の態度に憤慨している。リマの郊外の精糖工場を見学に訪れた時も、過酷な条件で働く黒人奴隷たち ―そこには700人の大人の奴隷の他に、200人にのぼる子どもの奴隷もいた― の境遇の改善および奴隷制の廃止を工場主に訴えている。また、自分の子どもが奴隷になるくらいなら死なせた方がましだと考えて、授乳をやめてしまった若い女奴隷に対して次のような感慨を抱いている。

この黒い肌の下には、誇り高い偉大な魂が宿っている。黒人たちが生来の自立した状態から隷属状態に突然追いやられても、その中には苦痛に耐え、隷従に屈することなく死んでいく不屈の精神の持ち主もいるのだ。(629-630)

フロラは確かに「黒人奴隷の臭気」(91)に嫌悪感を抱いたと告白している。これはこの当時流布した人種的な偏見で、『19世紀ラールス大辞典』にも「黒人 (nègre)」の項目に「黒人が興奮すると、皮膚から黒っぽい油のような汗が出て下着にしみをつけ、不愉快な臭いを放つ」というくだりがある。彼女もこうした偏見から免れてはいない。しかし一方で、20年後にハリエット・ビーチャー＝ストウが『アンクル・トムの小屋』(1852)で描いたように、黒人奴隷を犠牲者とみなしてその善良さを理想化するのではなく、フロラは被抑圧者に反抗と解放運動への正当な権利を認めている。こうした彼女の考えは、フランスの奴隷貿易廃止論者に影響を与えたとされている³⁰⁾。

フロラがペルーに来て発見したのは奴隷制の実態だけではない。彼女は同じ女性として、ペルーの女性の立場を注意深く観察している。彼女がまず気づいたのは、ペルーの女性たちもフロラと同様に結婚制度の犠牲となっていることだ。その一人が従姉のカルメンで、彼女は夫の放蕩と暴力に苦しめられたあげく、財産を蕩尽し性病に罹って彼女の元に戻ってきた夫

を結局、彼が死ぬまで看病した。家族に相談しても辛抱するよう彼女を説得するだけであった。その身の上話を聞いて、フロラは「これこそ結婚が解消できないために生じるモラルなのだ」(261)と、離婚を認めない結婚制度を批判している。「結婚こそが私の知っている唯一の地獄だ」(271)というカルメンの言葉に、「パリア」という言葉はフロラだけにあてはまる特殊なものではなく、女性全体に関わる問題だと認識する。それが後に、国境を越えた女性同士の連帯を呼びかけるきっかけとなる。

一方、フランス社会では当時、男性に対する女性の劣等性が自明の理と考えられていたが、ペルーでは反対に女性の方が男性より優れていることにフロラは気づく。それを体現していたのが、先に触れたガマラ夫人であった。『遍歴』に登場する男性はシャブリエ船長とエスキュデロを除き、政治家、軍人、ブルジョワの区別なく、全ての男性が貪欲でエゴイストイックな人物として描かれている。臆病な軍の司令官や軍に財産を没収されるのを恐れて右往左往する守銭奴たち―叔父ピオもその一人―の滑稽な姿が皮肉なタッチで描写されている。こうした支配層の中で、ガマラ夫人のみが優れた知性とナポレオンに喩えられる行動力を持った人物として登場している。周知のようにナポレオンは、ロマン主義世代の作家にとって英雄で憧れの的であったが、ナポレオンの名が男性ではなく女性を称える比喩として登場するところに、トリスタンの独自性が見出せる。

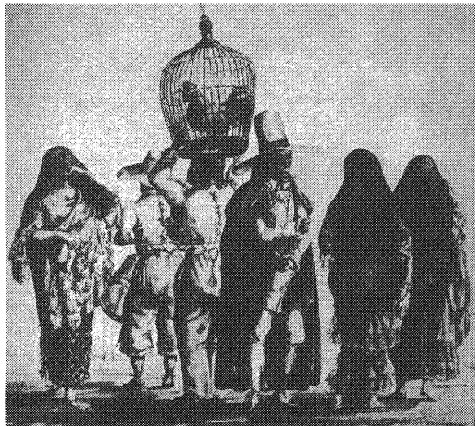
最下層の階級においても女性の優位性は変わらない。フロラは戦場でラバナス(ravanas)と呼ばれる従軍女商人たちと出会う。彼女たちは子連れで軍隊に付き従い、食事の準備や兵士の衣服の洗濯・修繕など兵士に必要な全てを賄うインディオの女たちであった。ラバナスは食糧確保のために本隊より先に出発し、野営地で住民の抵抗がある時には、村を略奪し破壊する獰猛さを見せた。彼女たちは無報酬にもかかわらず、労苦と危険に満ちた生活に進んで飛び込んでいた。こうしたインディオの女たちの勇敢さにフロラは敬意を表し、「揺籃期にある民族の中で女性の優位性を示す、これほど明白な証拠を挙げることはできないだろう」(432)と語っている。彼女は続けて「文明がもっと進んだ民族においても、男女どちらにも同じ教育が与えられたならば、同じことが言えるのではないだろうか」(432)

と述べている。トリスタンは女性には生来の「知性」が備わっていて、男性と平等の教育を受けることで「知性」を発揮できると考えていた。その考えは、知的活動を男性のみに限られた領域とみなす当時の価値観を覆すものであった。

フロラはさらに、リマの女性たちが享受している自由を称えて次のように述べている。

リマほど女性が自由で、大きな影響力を行使している所は地球上どこにも見当たらないだろう。そこでは女性が全面的に支配権を握っている。万事を突き動かす力は彼女たちから生じている。暑く、陶然とする気候がこの幸せな住人たちに残してくれる僅かなエネルギーを、リマの女性が独占しているかのようだ。(594)

フロラによれば、リマの女性は知性においても精神力でもリマの男性を凌駕している。彼女たちに自由な行動を許しているのが、「サヤ (saya)」と呼ばれる民族衣装 [スカートとマント (*manto*) と呼ばれる肩、腕、顔をすっぽり覆う袋状のものから成る] (図版5参照) であった。女性たちは一年中、目を除いて顔全体を覆うマントを着ているが、そのおかげで劇場や闘牛、公の集会や舞踏会、散歩など一人で自由に出かけることができ、自立した生活を楽しむことができた。既婚の女性でも匿名性を確保できるサヤのおかげで、他の男性とのアヴァンチュールも可能で、たとえば夫であっても妻の後をつけて監視することは禁じられていた。当時、フランスやイギリスでは女性が議会の傍聴することは原則的に禁じられていたが、ペルーではサヤを着た女性たちが議場に姿を現し、自由に政治的な意見を述べることができた。子どもの頃から



図版5 サヤを身につけたリマの女性

法律、風俗、習慣などに束縛されるヨーロッパの女性と比べて、「リマの女性」は人生のあらゆる段階で常に自分自身でいられる」(603-604)とフロラは述べている。

彼女〔リマの女性〕は決していかなる束縛も受けない。衣装が与えてくれる自由によって、娘時代は両親の支配から逃れることができるし、結婚しても夫の姓を名乗らず自分の姓を保ち、常に一家の主人であり続ける。家事にあまりにも疲れたら、サヤを着て外出する。ちょうど男が帽子を被ってそうするように。全てにおいて、男と同じ自立した行動をとることができた。(604)

このようにフロラは、自由を満喫するリマの女性たちを半ば羨望の念で見ている。しかしそれと同時に、リマの女性たちがサヤによって得られる自由を主に恋愛に費やし、しかも相手の愛情を高価な贈り物で測る悪習に染まっていると批判している。むしろそのエネルギーと知性を建設的な目的に向け、男性、さらには人類を導く「救世主」としての役目を果たすべきだとトリスタンは考えるようになる。

以上のように、『遍歴』は通常の旅行記とは違い、異国の自然や風俗・習慣を客観的な立場で描こうとはしていない。むしろ主観的な女性の視点で描いたもので、そこには様々な社会思想や政治的メッセージが織り込まれている。そこに自伝的な要素が入り込む余地があった。さらにデザンティが指摘しているように、彼女はこの旅によって「自らの魅力を自覚³¹⁾」し、美貌だけではなく知性、エスプリによって権力者にも影響を及ぼす力を自らの内に見出した。フロラにとってペルー旅行は言わば、自己の再発見の旅でもあった。それによって彼女は、夫から逃れる弱い立場の女性から、自らの意見を発信していく自立した女性へ変貌する。

4 フロラ殺害未遂事件

1835年1月、フロラはパリに戻り、娘のアリーヌと共にセーヌ左岸に居を構える。叔父から支給された年金のおかげで、生活に多少余裕のできた

彼女はさっそく本の執筆に取りかかる。7月には『外国人女性を歓待する必要性について』という30頁程度の小冊子を自費出版した。それは、一人旅の外国人女性に対する世間の厳しい眼や偏見、不当な扱いを批判したものであった。まさにフロラ自身の経験に基づき、例えば、一人旅の女は宿屋で一番ひどい部屋をあてがわれ、法外な値段を要求された上に軽蔑の眼差しで見られた。フロラは批判だけに留まらず、宿泊施設の紹介や、職業の斡旋、法律相談など様々な便宜をはかる「外国人女性のための協会」を設立することを提案している。彼女はむしろ女性の一人旅に重きを置き、それによって女性は男性と同じ公的空間に身を置いて全てを見、全てを知ることができる考えた。それは女性の平等を要求する闘争の第一歩であり、抑圧された者同士の連帯を訴えるものであった。

冊子のタイトルにある「外国人女性 (femmes étrangères)」という言葉は単に「他の国の女性」を意味するだけではない。誘惑され捨てられて上京してきた地方の娘や、フロラのように暴力的な夫の束縛から逃れてきたフランス人女性もその範疇に含まれる。さらに *étrangère* の概念には、フロラ自身の特殊な事情も反映されていた。彼女はペルーではフランス人、フランスではエキゾチックなスペイン・アンダルシアの女、またはオリエントの女とみなされ、どの国でも「よそ者 (*étrangère*)」扱いされた。しかしながらフロラは、異なる二つの文化に属することでアイデンティティの危機に陥るところか、むしろその曖昧さを歓迎し、常に「よそ者」の眼で世界を見極めようとした。戸籍名が「フロール (Flore)」というフランス語名にも関わらず、フランスでもスペイン風の「フロラ (Flora)」という名前を生涯にわたって使い続けたのが、何よりの証拠であろう。その結果、彼女は「人類愛」の名のもとに、国籍を越えてすべての人間が「唯一の同じ家族³²⁾」を形成することを提唱するようになる。こうしたユートピアへの夢はサン＝シモン主義やフーリエ主義にも見出せるが、フロラの場合、現実には実行可能な「段階的な改善³³⁾」を求めている点に独自性が見出せる。「我々は、自分で経験したことしか語ることができない³⁴⁾」と彼女自身が述べているように、フロラの思想はイデオロギー的なものではなく、むしろ「実存的³⁵⁾」であった。

『外国人女性を歓待する必要性について』は、その雄弁な文体と大胆な思想が評判を取り、たちまち売切れになる。その彼女に注目したのが、当時「新聞王」と称されたエミール・ド・ジラルダンであった。彼の要請でフロラは『ヴォールール』紙、『ルヴュ・ド・パリ』紙、『アルティスト』紙、『ジュルナル・デ・デバ』紙、『プレス』紙などに寄稿することになる³⁶⁾。また、ジラルダンの妻のデルフィーヌのサロンにも迎えられ、才気煥発で魅力的な女性として、さらに文壇では才能ある作家として注目を浴びた。そうした中で、1837年11月に『ある女パリアの遍歴』が出版される。そこには前述したように、叔父ピオをはじめとするペルーの親族やカトリック教会など支配階級への痛烈な批判が散りばめられていた。そのため、これを読んだペルーの親族は激怒し、叔父のピオは彼女に支給していた2500フランの年金を即刻差し止めた。権力者たちはこの本を発禁処分にして中世の魔女裁判さながらに、フロラの姿に似せた藁人形をリマの劇場前とアレキパの市役所前の広場に据え、公衆の面前で焼き払った。一方、フランスでは『アルティスト』紙が彼女を絶賛する書評³⁷⁾を載せるなど、有力な新聞各紙が取り上げ評判を呼んだ。『遍歴』は、ペルーの社会事情やその動乱を現場で体験したルポルタージュであると同時に、作者自身の波乱万丈な人生が描かれ、フランスの読者の関心を大いに引いた。

フランスに帰国してからのトリスタンは、サン＝シモン主義者の他にも社会主義運動を推進する人々と積極的な交流を持つようになる。土地や生産手段を共有する理想的な共同体、ファランジュ (phalange) の創設を主張したシャルル・フーリエや弟子のヴィクトル・コンシデランたちにも会い、その思想に触れた。また、イギリスの社会改革者ロバート・オーエンの集会にも参加している。オーエンは労働者の生活改善に力を入れ、協同組合や労働組合の育成に力を尽した人物で、1837年7月28日にフロラはパリの自宅に彼を招き入れている。その他にもフェミニストのウジェニー・ニボワイエやポーリーヌ・ロランなどとも一時、活動を共にし、1837年12月には議会に「離婚制度回復のための請願書」を提出している。その一方で劇場やサロンばかりか、オペラ座の仮面舞踏会にも足繁く通い、新聞のゴシップ欄に登場するなどパリの寵児となった。

ところで、夫のシャザルは1832年から妻の消息を知らず、彼女がペルーに行ったことも、ペルーからパリに戻り、娘のアリーヌと一緒に住んでいることも知らなかった。その間、彼は借金取りに追われてフランス中を逃げ回り、捕まって投獄され、釈放されてからはアルコールに溺れる荒んだ生活を送っていた。その彼の元に1835年10月15日に妻の居所を知らせる匿名の密告状が届く。そこには娘のアリーヌを妻から奪えば、相当な額の金を取れるとして、その手段も示唆していた。ゲルハルト・レオの推測によれば、密告の主は秘密警察で、社会思想家フーリエに宛てたフロラの熱狂的な手紙がその眼に留まり、危険思想の持ち主と睨まれたためとされる³⁸⁾。シャザルは密告状の指示に従って、学校帰りのアリーヌを拉致する。フロラは娘を取り戻すために訴訟を起こすが、たとえアルコール中毒の父親であっても法律上の親権は父親にあった。

1837年4月1日に、4ヶ月前から父親と一緒に暮らしていた娘のアリーヌから、父親の性的虐待を訴える手紙がフロラの元に届く。驚いた彼女は警察に通報し、シャザルは近親相姦のかどで逮捕、投獄される。しかしアリーヌと兄のエルネストの証言にも関わらず、シャザルは無罪放免となる。フロラは直ちに夫との別居訴訟を起こし、二人の子どもの親権を争う。1838年3月14日に、民事裁判所で夫との別居が認められる。しかし子どもの親権に関しては一部しか認められず、二人の子どものうちエルネストは父親の元に残り、アリーヌだけがフロラと一緒に暮らすことになる。敗訴した夫のシャザルは妻に対して「ヒステリックな憎悪³⁹⁾」を抱き、妻が自分の人生を台無しにしたばかりか、社会の基盤そのものを揺るがす危険分子だとみなすようになる。一種の錯乱状態に陥った彼は2丁のピストルを購入し、妻を付け狙うようになる。1838年9月10日、フロラは自宅を出たところで夫に撃たれ、重傷を負う。弾は左胸に入ったが、心臓に近すぎるために取り出すことはできなかった。翌日にはフロラの殺害未遂のニュースが新聞各紙に載り、一日のうちに『遍歴』のストックが売り切れる。彼女は一時危篤状態になるが、10日後には持ち直し、順調に回復して一ヶ月後には仕事を再開する。

そうした中で、1838年11月にフロラの小説『メフィスまたはプロレタリ

ア』が出版される。この小説を出版することで、彼女は『遍歴』で厳しく批判していた「虚構」を自ら執筆するという矛盾に陥っている。しかし、パスカル・ユスタッシュが指摘しているように⁴⁰⁾、「フロラ・トリスタンは小説家として書いているのではない」。「小説美学は彼女には関心がない。だから彼女は創作しているのではなく、自らの経験からその材料を汲み取っていた」。さらに『遍歴』を執筆していた頃と違い、1840年前後から「社会小説」の機運が高まっていた。1842年にはパリの下層階級をテーマにしたウージェヌ・シュエの『パリの秘密』が登場し、大衆がこぞって読むようになる。フロラはこうした兆候をいち早く捉え、自らの社会思想を小説の中に組み入れ、民衆を教育していこうと考えたようだ。「メフィス」とはメフィストテレスの略だが「悪の化身」ではなく「不幸の化身」を意味し、タイトルの「プロレタリア」は労働者階級というよりも「逆境にある人」を指している。小説の中では、メフィスは正義感に溢れた才能ある青年だが、貧困階級の出自ゆえに社会の表舞台で活躍できない人物として描かれている。トリスタンはメフィスに自らの社会思想やユートピアの夢を語らせ、一方、彼の恋人マレキタに彼女の容姿とその不幸な恋愛を投影した。

1838年12月、フロラは夫に殺されかけたにも関わらず、「死刑廃止の請願書」を議会に送り話題を呼んだ。それは夫への憎悪がなくなったわけではなく、犯罪を引き起こすのは労働者階級の置かれた悲惨な状況のせいだと考えたからだ。1839年1月にシャザルの裁判が始まる。この時、シャザル側の弁護士がフロラの不品行の証拠として『遍歴』の内容を引き合いに出したのは前述の通りである。その他にも『メフィス』において、若い娘が親の意志ではなく、自らの意志で伴侶を選ぶことを擁護する主人公のセリフを例に挙げ、弁護士はフロラの不道徳性を非難した⁴¹⁾。当時の結婚観では、こうした主張は社会秩序を乱す危険思想だとみなされていたのだ。2月に判決が下り、シャザルは20年の徒刑を宣告される⁴²⁾。夫の服役によってフロラは長年続いた彼の迫害から解放され、文筆活動に専念するようになる。子どもと自分の姓をシャザルからトリスタンに変更し、彼女は夫との縁を完全に切った。

5 プロレタリア階級の解放に向けて

1839年5月10日、フロラはイギリスのプロレタリア階級の悲惨さと階級闘争に関する本を書くためにイギリスに出発し、8月末まで3ヶ月間そこに滞在した。フランスより産業革命の進んだイギリスは「改革と実験の本場⁴³⁾」であり、イギリスを研究することでフランスの将来像が掴めると考えたのだ。彼女はイギリスで見聞したことをもとに、1840年に『ロンドン散策』を出版した。フロラは序文で執筆の意図を明らかにしている。

私は見かけの外観に眩惑などされなかった。イギリスの舞台のきらびやかで贅麗な舞台装置にも魅惑されなかった。舞台裏に潜り込み、役者の紅白粉や飾り紐の銅をこの目で見、彼らの生の声を聞いた。現実と真正面から向かいあい、物事を正確な価値で評価しようとした。本書は事実から、そしてできる限り細心の注意を払って集めた観察から構成されている⁴⁴⁾。

したがって彼女の旅の目的は、タイトルから連想されるような観光客のための名所旧跡めぐりではなかった。フランソワ・ベダリーダの言葉を借りれば、「階級と性の不平等のメカニズムを分解し、恒久的貧困 (paupérisme) の根源を抉り出し、裕福な金持ちと労働者階級とを隔てる巨大な溝を解明すること」、それと同時に「逸脱にいたる行程を分析すること」、「軽犯罪者や狂人、娼婦など、社会から排除され疎外された者たちの運命を理解できるよう説明すること」を目的としていた⁴⁵⁾。フロラはオーエン主義者の他にもチャーチスト運動「1838年から48年にかけてイギリスで展開された普通選挙権の獲得を目指す大衆運動」の指導者たちとも接触した。さらに政治の舞台である議会や、社交の場としてのアスコット競馬場を訪れただけでなく、子どもの労働や売春、監獄制度を調査するために実地に赴いて直に観察した⁴⁶⁾。19世紀前半のフランスでこうした調査を行った者としては、パラン＝デュシャトレやフレジエなどがいるが、前者は公娼制度の推進者として、後者はセーヌ県庁局長として下層階級を「危険な階級」とみなす体制側の人間であった。それに対して、全く異なる立場から、しかも女性が最下層

の地区に潜入して調査を行ったのは、フロラが最初であった。ゲルハルト・レオはフロラのイギリスへの旅を次のように結論づけている。

彼女は啓蒙主義とフーリエの理想の精神に影響を受けたフェミニストとしてイギリスに出発したが、プロレタリア階級の熱烈な擁護者としてフランスに戻ってきた。しかもその解放のための革命派の闘士として⁴⁷⁾。

1839年8月末にフロラはロンドンからパリに戻り、本の執筆に専念する。翌年5月には『ロンドン散策』がパリとロンドンで同時に出版される。この本を出版するにあたって、彼女は出版社を探すのに非常に苦労した。というのも、この本が『遍歴』のような波乱万丈な自伝的要素もなく、異国情緒豊かな国の話でもなかったからだ。その上、イギリスにおける労働者の悲惨な状況を告発するばかりか、労働者階級に革命を起こすよう促していた⁴⁸⁾。それはイギリスだけに留まらず、フランスにも飛び火する恐れがあった。そのためフランスの大新聞は沈黙し、社会主義を標榜する新聞のみが書評で彼女の本を取り上げた。フロラは1842年にこの本を再版する時、大衆向けに少し易しく書き直し「労働者階級へ」という献辞をつけた。本の値段も7.5フラン [7500円相当] から2フラン [2000円相当] まで大幅に下げたため、民衆の手に届くようになり、労働者階級の間で大きな反響をもたらしした。

この頃からフロラの関心は労働者階級の解放に専ら向かうようになる。彼女の本を読んで集まってきた改革派の労働者たちと対話を重ね、資料を集めて次の著作の構想を練った。そして最後に彼女が行き着いたのが「労働者連合」を組織することであった。それまではパン職人や大工など職業別に徒弟制度があり、徒弟はフランス中を遍歴して親方のもとの修行する同業組合 (compagnonnage) のシステムが存在していた。しかしそれも時代遅れとなり、その上、同業組合の内紛で乱闘事件が絶えなかった。フロラは、労働者たちが自らの利益を守るために職種を越え、国境を越えたインターナショナルな組織を作る必要があると考え、『労働者連合』を執筆した。しかしながら、政治的な結社を作ること自体が法律で禁じられて

いた19世紀において、組合を組織することは言わば、政府転覆の企みとみなされる危険性があった。それゆえこの本の出版を引き受ける出版社は見つからなかった。

労働者の新聞『民衆の巣箱』ではフロラのテキストの掲載の有無をめぐって査読会が開かれる。しかしそこでもフロラが労働者の欠点（仕事の憂さを晴らすために居酒屋で稼ぎを散財し、それが家族を悲惨な状況に追い込む原因となっている）を挙げていることが問題になった。査読メンバーからは労働者に不利なことはたとえ事実であろうとも、公表すべきではないという反対意見が出た。それは、全てをさらけ出して真実を述べることを信条とするフロラにとっては意外な反応であった⁴⁹⁾。結局、出版社を見つけることができなかったフロラは、彼女の運動に賛同する人々に寄付を募り、そのお金で本を出版することを思いつく。寄付者のリストにはジョルジュ・サンド、ラマルチヌ、ウージェーヌ・シュエのような社会派の作家や画家、彫刻家、建築家、医者、大学教授などの知識人および政治家がそこに名を連ね、さらに無名の労働者たちも参入した。

1843年5月に『労働者連合』が出版される。この本を読んだ労働者からは大きな反響が起り、彼女に賛同する進歩的な労働者たちが彼女の家に集まり、活発な討論が行われた。その中にはマルクスと親交の深いアーノルト・ルーゲもいて、当時パリに滞在していたマルクスは彼を通じて彼女の本を読んだとされている⁵⁰⁾。フロラはこの本の中で、労働者たちがお金を出し合って「ユニオン殿堂」を建て、病気や怪我、老齢で働けなくなった労働者を収容すると同時に、子どもたちに教育と職業訓練を施すことを提案した。フロラの独自性は、労働者階級の解放は金持ちの慈善事業や政府の施策によるのではなく、労働者自らの手によって成し遂げねばならないと主張していることだ。それはマルクス、エンゲルスが『共産党宣言』で同種の主張をする8年も前のことであった。

また、労働者階級の解放には女性の解放が不可欠だと唱えたことにも彼女の独自性がある。フロラは次のように述べている。「我々の不幸な社会では、女性は生まれながらのパリアで奴隷の身分にある。義務によって不幸になり、ほとんどいつも偽善か中傷かのどちらかを選ばねばならない⁵¹⁾」。

プロレタリア階級が社会における「パリア」であるとすれば、プロレタリアの女性は二重の意味で「パリア」であった。それゆえ彼女は、女性の解放が急務で、その後にプロレタリア階級の解放を推進すべきだと考えていた。そのためにも、女性は男性と同等の教育と職業選択の権利を獲得すべきだと主張した。しかし当時、労働者階級でも性別分業に基づく考え（女性は家事、育児など家庭内の仕事に専念すべきだという考え）が主流で、彼女の考えに賛同する者は少なかった⁵²⁾。フロラは自らの思想を普及させるためには、労働者自身にこの冊子を配り、彼らと直接対話する必要があるようになる。それがフランス遍歴を決意した理由であった。彼女は1843年9月のボルドー訪問を皮切りに、翌年4月から7月までリヨン、ディジョン、シャロンなどブルゴーニュ地方を回り、7月から9月まではアヴィニオン、マルセイユ、ツーロン、ニーム、モンペリエ、カルカソンヌ、ツールーズなど南仏を訪れて積極的に労働者たちとの対話を持った。

ドミニック・デザンティはフロラ・トリスタンの人生において、彼女が辿った精神的な変貌を幾つかの段階に分けて考察している⁵³⁾。まず、愛情を神聖化し「絶対的な愛」を求めた第一段階。それが挫折すると、第二段階では、ペルーでのエスキュデロとの出会いによって政治的野心を抱き、権力者の地位に就くことで自己実現を果たそうとする。しかし政治的野望を断念した第三段階では、彼女は自らを語り、自らの思想を書き記したいというエクリチュールへの思いに駆られるようになる。さらに第四段階で、書くだけに留まらず、その思想を社会に普及させるため、実践的な行動へと移行していく。とりわけメッセージの受け手が文字を読めない、または読む暇のない労働者階級であったため、自らが直接彼らのもとに赴いてメッセージを伝える必要があった。さらに彼女は文学的な才能よりも、他者に及ぼす自らの魅惑的な力を自覚していた。先に触れたようにフロラは『遍歴』や手紙の中で、多くの人々を惹きつけ、彼らに影響を与える自らの「磁氣的視線」に何度も言及している。自らのカリスマ的な力を自覚した彼女は、次第に宗教的な使命を負った「予言者」と自らを同一視するようになる。しかもそれは個人的資質だけではなく、時代の風潮でもあった。当時、ヴィクトル・ユゴーをはじめ多くのロマン主義作家たちは、僧侶に

代わって人類の魂を導く「祭司 (mage)⁵⁴⁾」の役割を作家が担っていると考えていた。さらにサン＝シモン主義者たちは女性を世界の救済者とみなし、アンファンタンの主導で「女の救世主」を求めてエジプトに旅立つほどであった。

フロラは『メフィス』の同名の主人公に次のようなセリフを語らせている。「女性の使命は男性に靈感を与え、その魂を高め […]、弛まぬ努力によって、偉大な事を成し遂げる力を男性に授けることにある⁵⁵⁾。」「女性は神の光を反映している⁵⁶⁾」というメフィスの言葉にあるように、フロラは女性こそが人類を導き平和な世界を築く役割を担うと考えていた。彼女はジョルジュ・サンドに宛てた手紙の中で自らを「人類愛の使徒」と呼び、次のように書いている。

奥様。詩人は使徒を助けることができますと思います。私はまさに人類愛の使徒という資格で、宣教の計画を立てた時にあなたのお力添えをお願いに参りました！神は詩人と使徒をお作りになりました。前者はその快い歌の調べによって人々を魅惑し、後者はそのいかめしい言葉によって人々を教化するよう神はお望みになったのです⁵⁷⁾。[強調は作者自身]

彼女は言わば、宗教的な使命を自らに課している。さらに夫シャザルの理不尽な襲撃によって重傷を負った後には、自らをイエス・キリストの受難に重ね合わせるようになる⁵⁸⁾。それ以降、彼女が被った全ての挫折や迫害は彼女にとって「十字架の道」となり、自らを「殉教者」と同一視するようになる。このように、フロラ・トリスタンの内には実践的な社会活動家と神秘的な「使徒」の二つが混在していた。それはデザンティが指摘しているように⁵⁹⁾、正規の教育を受けていないフロラのような独学者にとって、自らの「使命」を正当化するためには神を引き合いに出す必要があったからであろう。またはマイアー・クロスが解釈しているように、「救世主」という社会的ステイタスは「メッセージを伝えるための手段⁶⁰⁾」とみなすこともできる。それによって男の政治家にも比する威厳を帯び、ジェンダーや階級を越えて労働者たちに影響を与えることが可能になった。実

際、労働者たちの中には彼女を熱狂的に崇める「信者」のような支持者も現れた。

フロラはフランス遍歴の途中、1844年にボルドーで力尽きて倒れ、11月14日に脳充血で亡くなる。41年の短い生涯であった。しかし死後も労働者たちに影響を与え続け、1845年にツーロンで起こった大規模なストライキは、フロラの考えに賛同した労働者たちによるものであった。さらに彼らは彼女の功績を称えるために、自らの手で記念碑を建てることを決め、お金を出し合って1848年10月、ボルドーの墓地にフロラの像を建立した。しかし1851年のルイ＝ナポレオンによるクーデタ以降は、厳しい出版統制が行われ、さらに1870年の普仏戦争を経て71年のパリコミュン後は、激しい思想弾圧が行われた。そのため19世紀後半にはフロラ・トリスタンの名は次第に忘れられていった。彼女が再評価されるのは20世紀半ばであった⁶¹⁾。ペルーにおいては先に触れたように、『遍歴』は出版されるや現地の人々の怒りを買ひ、発禁処分になった。スペイン語訳の『遍歴』がペルーで出版されるには、1946年まで待たねばならない。しかもその解説者をはじめペルーの歴史家たちは、むしろ叔父のピオの側に立ち、フロラを「並外れた野心を持つ気まぐれな女⁶²⁾」として扱った。彼女がペルーで真の復権を果たすのはフェミニズム運動が起こった1960年代で、その先駆者としてフロラの名が挙がるようになる。現在では国民的作家として評価され、リマにはフロラ・トリスタンの名を冠した通りがあるという⁶³⁾。1977年にペルーの作家カルロス・ラマは次のように語っている。

フロラ・トリスタンはペルーの人々を罵倒したりはしなかった。それとは逆に、ペルーの悲惨な人々（奴隷、インディオ、召使、兵士、従軍女商人、貧しい人々、解放黒人奴隷、混血、職人、漁師、水夫、農民）、一要するに、ペルー人口の80パーセントを占める人々を褒め称えるために関心を持った作家はこの時代、彼女ただ一人であった⁶⁴⁾。

ところで、フロラ・トリスタンが『遍歴』を出版してパリで人気を博した頃、彼女はジョルジュ・サンドと比較されることがしばしばであった。

最後に、同時代を生きた二人の女性作家の関係を探り、その違いを明らかにすることで、トリスタンの独自性を浮き彫りにしていきたい。

6 フロラ・トリスタンとジョルジュ・サンド

1838年9月10日にフロラが夫のシャザルにピストルで胸を撃たれた時、ジョルジュ・サンドが犠牲になったという誤報がパリ中を駆け巡った。サンドは文壇で名を馳せていただけに人々の受けた衝撃は大きく、この殺害未遂事件はセンセーショナルな事件として新聞で大きく報じられた。その犠牲者がサンドではなく、フロラ・トリスタンであったことが判明したのはその翌日であった。当時の人々が二人を混同したのも当然で、二人の女性作家には多くの共通点が見出せる。

サンドもトリスタンと同様に、父親からはポーランド国王フリードリッヒ＝アウグストに遡る「貴族の血」と、小鳥屋の娘であった母親の「庶民の血」という二つの血を受け継いでいた。生まれた年もサンドが1804年で、1803年生まれフロラより14ヶ月年下に過ぎなかった。1848年の二月革命の時にはサンドは民衆の側に立ち、共和主義を唱えたこともフロラと重なる。また、不仲な夫との確執や別居裁判、さらには結婚制度への異議申し立てや、男女平等の権利を要求したことも二人の女性に共通している。どちらも夫から自立した女性として男性社会から糾弾され、そのプライベートな生活がスクランダラスなゴシップとして新聞などで報じられた。サンドは1830年代後半から社会主義、共和主義に目覚め、キリスト教的社会主義者ラムネーや、政治社会哲学者ピエール・ルルーなどの影響を受けて「社会小説」を書き始めていた。したがって、1840年代には二人とも社会派の作家として活躍していた。また、トリスタンに大きな影響を与えた人物の一人が、同業組合の改革を唱えたアグリコル・ペルディギエで、彼女の『労働者連合』は、彼の著作から着想を得ていた⁶⁵⁾。ペルディギエはサンドとも深く関わり、サンドは彼をモデルにして小説『フランス遍歴の職人』(1840)を書いている。

フロラ・トリスタンはサンドとは遅くとも1836年に知り合い、女性作家

としての友情を育んでいた⁶⁶⁾。『遍歴』を出版した時は、序文でサンドを批判しているものの、フロラはサンドに心のこもった献辞を書いてこの本を献呈している。二人はある程度親密な関係を保ち、フロラの記事が新聞に載るようサンドが便宜を図ることもあった。しかし1840年以降、トリスタンが労働者階級の問題に専念し始めると、サンドの方が距離を置くようになる。例えば、1844年のジュール・ブコワラン宛の手紙で、彼女は次のように書いている。

彼女〔フロラ・トリスタン〕は活動的で勇敢で真面目な人だと思いますが、傲慢で、自らの社会主義的な発見 —それは幼稚なものに過ぎないのですが— に絶対的な信頼を持ちすぎています。あなた自身、彼女の話聞いてそれを判断して下さい。もしあなたの村のプロレタリア階級にとって何か役に立つ良いことが彼女にあるならば —彼女はプロレタリア階級の経済的な救済に少し入れ込みすぎですが— 彼女の手助けをして下さい。そうでなければ、丁重に断ってください⁶⁷⁾。
〔下線引用者〕

サンドは、理論的な次元において社会改革を推進するだけに留まり、フロラのように当時法律で禁じられていた政治結社を組織することまでは考えていなかった。マドレーヌ・ルベリユーが指摘しているように、産業革命の先進国イギリスに直接赴き、「新しい労働者階級⁶⁸⁾」の悲惨な状況を目撃したトリスタンとは違い、サンドの外国への旅は常に恋人を伴った「愛情旅行⁶⁹⁾」で、彼女はそこで労働者階級の実態を探ろうとはしなかった。サンドは確かに『オラース』や『アンドレ』などで労働者階級の女性を描いているものの、その生活基盤はあくまでも社交界やサロン、劇場といったブルジョワ社会であった。それに対して、トリスタンの場合は晩年になるにつれ、労働者階級との対話を重視するようになる。その一方、彼女は労働者階級の救済という理想に燃えるあまり、同じ社会運動に携わる者たちの個々の事情を鑑みず、彼らを容赦なく批判した⁷⁰⁾。彼女の思想を理解できない労働者たちに対してもフロラは憤りを露にした。その態度をサンドは「傲慢」とみなし、苛立ちを覚えていたようだ⁷¹⁾。また、サンド

は48年の2月革命の頃、女性の参政権を求めるフェミニストたちとは一線を画し、参政権よりはまず、市民権の獲得を目指すべきだと主張した。女性の大多数が政治に関心を抱くまで期が熟すのを待とうと考えていたのだ。それと同様に、労働者階級の多くがまだ社会運動に目覚めていない状況で、労働者たちに直接働きかけるのは時期尚早と考えていた。それが結果を急ぐ行動派のトリスタンと、彼女の2倍近く長生きしたサンドとを分かち違いと言えよう。

ステファン・ミショーはサンドとトリスタンを比較して、その違いは一方が「根からの小説家⁷²⁾」で「想像の世界⁷³⁾」を選んだのに対し、他方は自らを直接テキストの中に投影し、最終的には「想像の世界」よりも「行動⁷⁴⁾」を選んだことにあつたとした。サンドの場合、「虚構というマスクの下で、より普遍的な人間の真実に達することができた⁷⁵⁾」が、現実から距離を置いた「虚構」は、行動型のトリスタンには適していなかった。立ち止まることのない彼女の生き方は、その著作のタイトルに含まれる「遍歴 (pérégrinations)」「散策 (promenade)」「フランス一周 (tour de France)」といった「行動 (action)」と関わりのある言葉に如実に表れている。

また、「救世主」として自らの思想を労働者たちに普及させようとするフロラの神がかり的な態度がサンドには気に入らなかったようだ。彼女はフロラの呼びかけに応じて『労働者連合』の出版のために40フラン寄付しているが、その一方で、先に引用した手紙の中でその思想を「幼稚」だと批判した。労働者詩人シャルル・ボンシーに宛てた手紙でもサンドはフロラを「芝居がかった女 (comédienne)⁷⁶⁾」と呼んで不信の念を露にしている。それに対してフロラの方はサンドに宛てた手紙の中で、彼女を「詩人」と呼び、「あなたは私の殉教を信じてくれない」が「私は使徒として恐ろしい苦しみを舐めている！」と書き、「詩人」と「使徒」の性質の違いを明らかにしている⁷⁷⁾。このように社会的な思想では似通った二人の女性作家だが、心情的には互いに相容れないものがあつた。フロラは労働者階級においてはエレオノール・ブランという熱狂的な信奉者を得たが、サンドをはじめ、フェミニズム運動を推進する女性の活動家との真の連帯を実現することはできなかった。こうした運動においても孤立して「パリア」とし

て生きざるを得なかったところに彼女の悲劇がある。その上、サンドはトリスタンより1歳年下だが、作家としてのデビューは5年先んじていた。それゆえフロラの作品はサンドの亜流と過小評価され、彼女の名はサンドの陰に埋もれる結果となった。

*

*

*

以上のように、フロラ・トリスタンの生涯と作品を年代順に辿ることで、彼女が「バリア」から「救世主」へ変貌する過程が明らかになった。トリスタンに特徴的なのは彼女が矛盾に満ちた多元性を示していることだ。身体面では虚弱で、絶えず自殺の衝動に駆られていたのに、一旦信念を持って行動する時には、男性を凌ぐ意志の強さとエネルギーを発揮した。国籍においてはペルーでは洗練されたフランス人、フランスではオリエントのイメージを伴うスペイン人とみなされ、言わば国籍不詳の女性として立ち現れている。また、父から「名門の血」を、母から「民衆の血」を受け継いだが、最後までどちらの階級にも完全に属することはなかった。まさに彼女は「民衆にとってはあまりにブルジョワ的で、ブルジョワにとっては民衆的でありすぎた⁷⁸⁾」。それゆえ労働者の一人が彼女を「バリア=大公妃(Paria-Archiduchesse)」と呼んだのも不思議ではない。彼女は社会の犠牲者であると同時に、神に選ばれた「救世主」として時には女王のような傲慢な態度を見せた。思想的にもサン=シモン主義、フーリエ主義、オーエン主義など様々な社会主義思想に触れ、影響を受けながらもその主義に完全に染まることはなかった⁷⁹⁾。フロラ・トリスタンは様々な矛盾を内に抱えながらも、自ら社会の外に身を置き「バリア」の地位を引き受けることで、「真実」を述べる自由を獲得した。いかなる階級にもいかなる主義にも属さないがゆえに、人種、性別、階級を超えたインターナショナルな連帯を主張するに至った。それが彼女の本質であった。

ところで、ジョルジュ・サンドはフロラ・トリスタンの死後も彼女と関わりを持つことになる。フロラの娘アリーヌは母の死後、ジュール・ロー

ルとポーリーヌ・ロランの世話でパリのバスカン女子寄宿学校に職を得ていた。そこはサンドの娘ソランジュが育った寄宿学校で、サンドはロランからアリーヌを紹介されている。アリーヌは母親似のエキゾチックな美女で（図版6参照）、サンドは「高慢で怒りっぽい」母親のフロラとは違い、「慎ましく情愛深い」娘だとアリーヌを高く評価している⁸⁰⁾。彼女に共感を抱いたサンドは、フリーエ主義者エドゥアール・ド・ボンペリに彼女との結婚を強引に勧めるほどであった（結局、この縁談はうまくいかなかった）。



図版6 アリーヌ（ポール・ゴーギャンの母）

アリーヌは反体制派の新聞『ナショナル』紙の編集者クロヴィス・ゴーギャンと知り合い、1846年に彼と結婚する。二人の間には息子が二人生まれるが、1848年に生まれた次男がポール・ゴーギャンであった。51年のルイ＝ナポレオンのクーデタで亡命を余儀なくされたゴーギャン一家は、当時権力の絶頂にあったペルーの大叔父ピオの誘いでリマに向かう。その途中で夫のクロヴィスは急死し、アリーヌと二人の息子はピオの元で4年間過ごす。しかし舅の危篤の知らせを聞いてアリーヌは息子たちを連れてフランスに帰国する。大叔父のピオも1860年に亡くなり、5000ピアストルの年金をアリーヌに遺したにも関わらず、他の親族に遺産を奪われてしまった。アリーヌは帽子屋のアトリエを開いて生計を立てるが、1867年、奇しくも母親と同じ41歳で亡くなる。息子のポール・ゴーギャンの画家としての活動は周知の通りで、フランスからタヒチ島に渡ったポールの内に、祖母フロラと同じ資本主義体制への憎悪を見出すことができる。一方は社会的領域において、他方は芸術的領域において

大胆な先駆者となり、互いに顔を見ることはなかったものの、祖母から孫へその反骨精神が受け継がれたと言えよう。

【註】

- 1) Jules Janin, < Madame Flora Tristan >, in *Sylphide*, 5 janvier 1845, cité par Gerhard Leo, *Flora Tristan. La révolte d'une paria*, Les Éditions de l'Atelier, Paris, 1994, p.92.
- 2) 当時、ペルー国内はスペインからの独立戦争で混乱状態にあり、手紙は紛失してしまったとされている。
- 3) Flora Tristan, *Pérégrinations d'une paria*, Actes Sud, Arles, 2004, p.96. 『遍歴』からの引用はすべてこの版によるもので、以下、本文中に頁数のみを記す。
- 4) Dominique Desanti, *Flora Tristan. La Femme révoltée*, Hachette, Paris, 1972, p.13.
- 5) *Ibid.*
- 6) Flora Tristan, *Union ouvrière, Des femmes*, 1986, Paris, p.185.
- 7) 離婚に関しては、フランス革命中の1792年に離婚法が一旦成立するが、王政復古時代の1816年に離婚法の廃止が議会で可決された。
- 8) Gerhard Leo, *op.cit.*, p. 38.
- 9) *Ibid.*
- 10) Dominique Desanti, *op.cit.*, p.27.
- 11) 『19世紀ラールス大辞典』によれば、1821年にカジミル・ドラヴィーニュの5幕物の悲劇『パリア』(*Le Paria*) がオデオン座で上演された。
- 12) Cf. La rubrique de < paria > dans *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle* de Larousse.
- 13) Christine Planté < Entre le rêve et l'action : *Les Pérégrinations d'une paria* >, in *De Flora Tristan à Mario Vargas Llosa*, Presses Sorbonne Nouvelle, Paris, 2004, p.40.
- 14) Madame de Staël, *De la littérature*, GF-Flammarion, Paris, 1991, p. 342.
- 15) Cf. Christine Planté, *op.cit.*, p.41.
- 16) Dominique Desanti, *op.cit.*, p.39.
- 17) Gerhard Leo, *op.cit.*, p. 41.
- 18) *Gazette des Tribunaux*, 1^{er} février 1839, cité par Gerhard Leo, *op.cit.*, p.44.
- 19) シャプリエ船長は後に、ペルーのフロラの滞在先まで会いに来て結婚を迫るが、彼女は彼を退けるために、自分への愛の証として両親の結婚証明書

を偽造するように頼む。正義感溢れる彼はそれを断り、憤然として彼女の元から永久に去る。その後、彼はランスに向けて出発したが、途中で船の消息が絶たれた。

- 20) Michelle Perrot, « Flora Tristan enquêtrice », in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*, Éditions Universitaires de Dijon, Dijon, 1985, p.84.
- 21) Flora Tristan, *La Paria et son rêve*, Presses Sorbonne Nouvelle, Paris, 2003, p.116.
- 22) Catherine Nesci, *Le Flâneur et les flâneuses. Les femmes et la ville à l'époque romantique*, ELLUG (Université Stendhal), Grenoble, 2007, p.366.
- 23) Christine Planté, *op.cit.*, p.39.
- 24) 「イニシエーションの旅」に関しては、Catherine Nesci, *op.cit.*, pp.362-363を参照のこと。
- 25) Dominique Desanti, *op.cit.*, p.159.
- 26) Catherine Nesci, *op.cit.*, p.340.
- 27) フロラは『遍歴』の序文で次のように言っている。「事実を語るだけならば、それを見るのに眼だけで十分であろう。しかし人間の知性や情熱を評価するには、教育だけでは十分ではない。さらに苦しんだ経験があること、非常に苦しんだ経験が必要だ。というのも不幸によってのみ、我々の価値や他人の価値を正しく知ることができるようになるからだ」(40)。
- 28) フロラは「彼ら〔アレキバの人々〕の料理はひどい味で食べ物はまずく、料理法はまだ未開なままだ」(316)と述べるなど、「文明国」ヨーロッパの食卓と比べて「不潔」で「野蛮」だと偏見に満ちた感想を述べている。
- 29) 奴隷制廃止を求める政治的な動きは、フランス革命におけるジャコバン政権時代に遡ることができる。この時、奴隷制廃止が検討され、1794年に国民公会で奴隷制廃止が宣言された。しかしそれに呼応してサント＝ドミンゴ島（現在のハイチ）で黒人奴隷が反乱を起こすと、ナポレオンによって制圧されてしまった。サント＝ドミンゴ島は結局1804年に独立を果たすが、アフリカなどフランス植民地の奴隷制が廃止されるのは1848年まで待たねばならない。
- 30) Gerhard Leo, *op.cit.*, p.54.
- 31) Dominique Desanti, *op.cit.*, p.111.
- 32) Flora Tristan, *Nécessité de faire un bon accueil aux femmes étrangères*, L'Harmattan, Paris, 1988, p.83.
- 33) *Ibid.*, p.56.
- 34) *Ibid.*, p.57.
- 35) Denys Cuche, Introduction de *Nécessité de faire un bon accueil aux*

femmes étrangères, p.29.

- 36) 例えば『アルティスト』紙ではフロラは芸術至上主義を否定し、芸術の使用命として社会的・経済的・文化的次元での貢献を主張している (Cf. Henriette Bessis, < Flora Tristan et l'art >, in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*).
- 37) 『アルティスト』紙の記者はこの本に関して「彼女の成熟した才能は、高度な哲学思想を予感させる」と称賛している (cité par Gerhard Leo, *op.cit.*, p.86)。
- 38) Gerhard Leo, *op.cit.*, pp.96-97.
- 39) *Ibid.*, p.103.
- 40) Pascale Hustache, Préface de *Méphis*, Indigo & Côté-femmes, Paris, 1996, t.I, p.12.
- 41) Gerhard Leo, *op.cit.*, p.107.
- 42) 夫のシャザルは17年間刑に服した後、1856年にナポレオン三世の恩赦を受ける。4年後に死亡。
- 43) François Bédarida, Introduction de *Promenades dans Londres*, La Découverte, Paris, 2003, p.16.
- 44) Flora Tristan, *Promenades dans Londres*, La Découverte, Paris, 2003, pp.61-62.
- 45) François Bédarida, *op.cit.*, p.11.
- 46) 『ロンドン散策』の詳細は、稿を改めて分析する予定である。
- 47) Gerhard Leo, *op.cit.*, p.135.
- 48) フロラの思想はマルクス、エンゲルスから「空想的社会主義」と批判されたオーエンらの思想よりも過激で、イギリスの改革運動をフランス革命と比べて次のように言っている。「今や我々は結果が言葉に対応しているか、イギリスの同志たちが、89年以来我々が彼らに与えてきた手本を見習うか、見ていくことにしよう。彼らが戦いを挑み、城に火をつけ、自らの権利を取り戻すまで武器を捨てないかどうか、見ていこう」 (*Promenades dans Londres*, p.96)。
- 49) フロラ・トリスタンは『労働者連合』の第一章の最後に労働者に向かって次のような言葉を述べている。「労働者たちへ。あなた方に予め言っておく。私はへつらいは大嫌いだ。私の言葉は率直で厳しく、時にはやや厳しすぎるかもしれない。あなた方の欠点は何なのか、あなた方の自尊心を傷つけることを恐れずに率直にはっきりと言うことが有益で緊急かつ不可欠だと私は思う」 (*Union ouvrière*, pp.150-151)。
- 50) Cf. Gerhard Leo, *op.cit.*, pp.158-159.

- 51) Cité par Dominique Desanti, *op.cit.*, p.302.
- 52) Cf. Michelle Perrot, « L'éloge de la ménagère dans le discours des ouvriers français au XIX^e siècle », in *Mythes et représentations de la Femme au dix-neuvième siècle*, Champion, Paris, 1976.
- 53) Dominique Desanti, *op.cit.*, pp.227-228.
- 54) Cf. Paul Bénichou, *Les mages romantiques*, Gallimard, Paris, 1988.
- 55) Flora Tristan, *Méphis*, t.II, Indigo & Côté-femmes, Paris, 1996, p.44. 強調は作者自身。
- 56) *Ibid.* 強調は作者自身。
- 57) Flora Tristan, *La Paria et son rêve*, p.236.
- 58) フロラ殺害未遂事件の裁判の一週間後、フロラは支持者に宛てた手紙の中で次のように言っている。「今日から一週間前のちょうど同時刻に私は私のカルヴァリオの丘〔キリスト磔刑の丘〕に登りました。主イエス・キリストと同じように、二人の女泥棒の間で私は十字架にかけられたのです」(*La Paria et son rêve*, p.105)。
- 59) Dominique Desanti, *op.cit.*, p.229.
- 60) Maire Cross, « L'itinéraire d'une femme engagée dans la cité, Flora Tristan. Un exemple à éviter ? », in *Femmes dans la Cité 1815-1871*, Créaphis, Grâne, 1997, p.327.
- 61) ジュール・ピエシュが1929年に博士論文『フロラ・トリスタンの生涯と作品』でトリスタンを取り上げ、彼女の著作が注目を浴びるようになった。とりわけ1954年にアンドレ・ブルトンが彼の雑誌 *Le Surréalisme même* でトリスタンの功績を称えたことで彼女の名が知られるようになる。
- 62) Magda Portal, « Ma découverte de Flora Tristan », in *Un Fabuleux destin. Flora Tristan*, p.12.
- 63) *Ibid.*, p.14.
- 64) Carlos Rama, « El utopismo socialista en America latina », cité par Denys Cucho, « Le Pérou de Flora Tristan : du rêve à la réalité », in *Un Fabuleux Destin. Flora Tristan*, p.31.
- 65) Cf. Flora Tristan, *Union ouvrière*, p.148.
- 66) Gerhard Leo, *op.cit.*, p.89.
- 67) George Sand, *Correspondance*, t.VI, Garnier, Paris, 1969, p.509.
- 68) Madeleine Rebérioux, « George Sand, Flora Tristan et la question sociale », in *Flora Tristan, George Sand, Pauline Roland*, Créaphis, Paris, 1994, p.87.
- 69) *Ibid.*, p.88.
- 70) 例えばフロラは、フランス遍歴でサン＝テチエンヌに寄るが、そこで労働

者救済に携わる弁護士や医者を「エゴイストで貪欲」と非難する。しかしそれは偏見に満ちた性急な判断に過ぎなかった (Cf. Didier Nourrisson, « Flora Tristan dans la Loire », in *Flora Tristan, George Sand, Pauline Roland*, p.24)。

- 71) Cf. Stéphane Michaud, « En miroir : Flora Tristan et George Sand », in *Un Fabuleux destin. Flora Tristan*, p.204.
- 72) Stéphane Michaud, *op.cit.*, p.201.
- 73) *Ibid.*, p.208.
- 74) *Ibid.*
- 75) *Ibid.*, p.201.
- 76) George Sand, *op.cit.*, p.410.
- 77) Flora Tristan, *La Paria et son rêve*, p.238. 強調は作者自身。
- 78) Evelyne Bloch-Dano, *Flora Tristan. La femme-messie*, Grasset, Paris, 2001, p.265.
- 79) 『ロンドン散策』の初版「オーエン」の章でフロラは次のように断言している。「あらゆる誤解を避けるため、私はサン＝シモン主義者でもフーリエ主義者でもオーエン主義者でもないと言明しておきたい」(*Promenades dans Londres*, p.317)。
- 80) George Sand, *op.cit.*, p.789.

【参考文献】

1. フロラ・トリスタンの著作

- Tristan, Flora. 1996, *Méphis*. 2 vol. Paris : Indigo & Côté-femmes.
- : 1988, *Nécessité de faire un bon accueil aux femmes étrangères*. Paris : L'Harmattan.
 - : 2003, *La Paria et son rêve. Correspondance établie par Stéphane Michaud*. Paris : Presses Sorbonne Nouvelle.
 - : 1998, *Le Tour de France. Journal 1843 - 1844*, 2 vol. Paris : Indigo & Côté-femmes.
 - : 2004, *Pérégrinations d'une paria*. Arles : Actes Sud. (2004、小杉隆芳訳『ペルー旅行記1833-1834 ある女パリアの遍歴』、東京、法政大学出版局)
 - : 2003, *Promenades dans Londres ou L'aristocratie et les prolétaires anglais*. Paris : La Découverte. (1997、小杉隆芳／浜本正文訳『ロンドン散策 イギリスの貴族階級とプロレタリア』、東京、法政大学出版局)

: 2003, *Réalisations Œuvres*. Paris : L'Harmattan.

: 1986, *Union ouvrière*. Paris : Des femmes.

2. 研究書、研究論文など

Adler, Laure. 1979, *À l'aube du féminisme : Les premières journalistes (1830 - 1850)*. Paris : Payot.

Agmogathe, Daniel et Grandjonc, Jacques. 1985, « L'Union ouvrière de Flora Tristan : internationalisme et organisation de la classe ouvrière », in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*. Dijon : Éditions Universitaires de Dijon.

: 1986, Introduction d'*Union ouvrière*. Paris : Des femmes.

Baelen, Jean. 1970, « Une romantique oubliée : Flora Tristan », in *Bulletin de l'Association Guillaume Budé*, No.4.

: 1972, *La vie de Flora Tristan. Socialisme et féminisme au 19^e siècle*. Paris : Seuil.

Bénichou, Paul. 1988, *Les mages romantiques*, Paris : Gallimard.

Bessis, Henriette. 1985, « Flora Tristan et l'art », in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*.

Bédarida, François. 2003, Introduction de *Promenades dans Londres ou L'aristocratie et les prolétaires anglais*. Paris : La Découverte.

Bloch-Dano, Evelyne : 2001, *Flora Tristan. La femme-messie*. Paris : Grasset.

: 2001, *Flora Tristan. < J'irai jusqu'à ce que je tombe >*. Paris : Payot.

Carballo, Fernando. 2004, « Double regard sur Flora Tristan », in *De Flora Tristan à Mario Vargas Llosa*. Paris : Presse Sorbonne Nouvelle.

Club Flora Tristan de Paris. 1985, « Flora Tristan et le mouvement féministe et syndical d'aujourd'hui », in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*.

Cross, Mère, 1997, « L'itinéraire d'une femme engagée dans la cité, Flora Tristan. Un exemple à éviter ? », in *Femmes dans la Cité 1815 - 1871*, Grane : Créaphis.

Cuche, Denys. 1985, « Le Pérou de Flora Tristan : du rêve à la réalité », in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*.

: 1988, l'Introduction de *Nécessité de faire un bon accueil aux femmes étrangères*. Paris : L'Harmattan.

Desanti, Dominique. 1972, *Flora Tristan. La femme révoltée*. Paris : Hachette.

: 1985, « Flora... Messie du temps des prophètes ou Messie parce que femme ? » in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*.

: 2004, « Témoignage : Flora, la Résistance, le communisme et le néo-féminisme

- des années 1970 », in *De Flora Tristan à Mario Vargas Llosa*.
- Fraisse, Geneviève. 1985, « L'usage du droit naturel », in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*.
- Hart, Kathleen. 2004, « Tracing New Routes : Flora Tristan's *Peregrinations of a Pariah* », dans *Revolution and Women's Autobiography in Nineteenth-Century France*. Amsterdam/New York : Rodopi.
- Hook-Demarle, Marie-Claire. 1985, « Le langage littéraire des femmes enquêtrices », in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*.
- Hustache, Pascale. 1994, « *Méphis*, entre roman populaire et roman moral », in *Flora Tristan. George Sand. Pauline Roland. Les femmes et l'invention d'une nouvelle morale 1830 – 1848*, Paris : Créaphis.
- : 1996, Préface de *Méphis*. 2 vol., Paris : Indigo & Côté-femmes.
- Michaud, Stéphane. 1985, « En miroir : Flora Tristan et George Sand », in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*.
- : 1994, « Deux approches du changement social : Flora Tristan et Pauline Roland au miroir de leur correspondance », in *Flora Tristan. George Sand. Pauline Roland. Les femmes et l'invention d'une nouvelle morale 1830 – 1848*.
- : 2003, Introduction de *La Paria et son rêve. Correspondance établie par Stéphane Michaud*. Paris : Presses Sorbonne Nouvelle.
- : 2004, Préface de *Pérégrinations d'une paria*. Arles : Actes Sud.
- Lejeune, Paule. 2003, Présentation de *Réalizations Œuvres*. Paris : L'Harmattan.
- Leo, Gerhard. 1994, *La révolte d'une paria*, Paris : Les Éditions de l'Atelier.
- Leveque, Pierre. 1985, « Mission impossible ? Flora Tristan en Bourgogne, vue par la presse locale », in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*.
- Nesci, Catherine. 2004, « Promenades dans Lima ; la peinture des mœurs dans les *Pérégrinations d'une paria* de Flora Tristan », in *De Flora Tristan à Mario Vargas Llosa*.
- : 2007, *Le Flâneur et les flâneuses. Les femmes et la ville à l'époque romantique*, Grenoble : ELLUG (Université Stendhal).
- Nourrisson, Didier. 1994, « Flora Tristan dans la Loire », in *Flora Tristan. George Sand. Pauline Roland. Les femmes et l'invention d'une nouvelle morale 1830 – 1848*.
- Perrot, Michelle. 1976, « L'éloge de la ménagère dans le discours des ouvriers français au XIX^e siècle », in *Mythes et représentations de la Femme au dix-neuvième siècle*, Paris : Champion.

- : 1985, « Flora Tristan enquêtrice », in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*.
Planté Christine. 1985, « Flora Tristan, écrivain méconnu ? », in *Un fabuleux destin. Flora Tristan*.
- : 2004, « Entre le rêve et l'action : *Les Pérégrinations d'une paria* », in *De Flora Tristan à Mario Vargas Llosa*.
- Rebérioux, Madeleine. 1994, « George Sand, Flora Tristan et la question sociale », in *Flora Tristan. George Sand. Pauline Roland. Les femmes et l'invention d'une nouvelle morale 1830 – 1848*.
- Sand, George. 1969, *Correspondance* t.VI. Paris : Garnier.
- Scheler, Lucien. 1947, « La geste romantique de Flora Tristan », in *Flora Tristan. Morceaux choisis*. Paris : La Bibliothèque française.
- Staël, Madame de. 1991, *De la littérature*, Paris : GF-Flammarion.
- Vargas Llosa, Mario. 2003, Préface de *La Paria et son rêve. Correspondance établie par Stéphane Michaud*. Paris : Presses Sorbonne Nouvelle.
- 水田珠枝 1994 『女性解放思想史』、東京：ちくま学芸文庫。